

# 地域の生態系に基づく住居システムに関する研究 ——東南アジアにおける伝統的住宅生産技術と 自助 (Self-help), 相互扶助 (Mutual aid) による ロー・コスト・ハウジング——

布野 修司 乾 尚彦  
安藤 邦広 岡 利実  
勝瀬 義仁 山下 浩一  
浅井 賢治 ハルフィー・ジョージ

## 目 次

### 目 次

#### はじめに

#### I. 地域の生態系に基づく住居システム

1. 新たなパラダイムの必要性 (略)
2. 地域の生態系に基づく住居システム (略)
3. 東南アジアにおける伝統的住宅生産技術と自助相互扶助によるロー・コスト・ハウジング (一部略)

#### II. 東南アジアの伝統的住居

##### はじめに (略)

##### 1. 東南アジアの自然と民族 (生産基盤)

- 1-1 東南アジアの自然 (略)
- 1-2 生産基盤の分類 (一部略)
- 1-3 民族 (略)

##### 2. 住居形態の類型

- 2-1 類型化の視点
- 2-2 伝統的住居 (略)
- 2-3 居住システム (略)
- 2-4 集落・住居の基本形態 (略)

##### 3. 住宅構法の類型

- 3-1 類型化の方法
- 3-2 主架構の類型 (一部略)
- 3-3 住宅構法の概要 (略)
- 3-4 部位別構法の類型 (略)

#### III. 東南アジアにおける都市化と都市住居

##### 産業化以前の都市と住居——小型家産制国家とアジアの小共同体

1. 発展途上国の都市化——その過程と構造
2. 東南アジアの都市とその生態
  - 2-1 植民都市の形成
  - 2-2 東南アジアの都市化とその類型 (略)
  - 2-3 人口移動の生態 (略)
3. 都市住居の実態
  - 3-1 Klong Toey 地区 (略)
  - 3-2 Tondo 地区 (略)

#### IV. 伝統的住宅生産技術と自助・相互扶助によるローコスト・ハウジング

1. 居住政策の概要 (一部略)

#### 2. Housing Projects の概要 (略)

- 2-1 Housing Projects の概要
- 2-2 Sites & Services Project
- 2-3 Slum Improvement Project
- 2-4 Rural Housing

#### 3. 伝統的住宅生産技術と自助・相互扶助によるローコストハウジング

- 3-1 適正技術と住民参加
- 3-2 Informal Sector の試み
- 3-3 Self-help Housing の諸問題

##### 文献 (略)

##### はじめに

本研究は、地域に固有な住居のあり方をどう考えるか、すなわち、地域の自然や文化、その生態に即した住居のあり方を支える技術や仕組みはどのようなものであるべきか、伝統的な(産業化以前の)、あるいは在来の(土着的な)住宅生産技術を現代に如何に生かすか、その関連をどう捉え直すか、などを大きな視点としながら、比較的安定した(閉じた)住居のシステムを維持してきた地域を対象とし、それを支える技術や仕組みを、自然や伝統、素材の生産や流通、建設のための組織やそれを支える集団などを含めた地域の生態にもとづいて具体的に明らかにすること、そしてさらに、現在の諸条件の中でそれをどのように生かすことができるか、それに学びながらどのような住居のシステムを提案することができるかについて、具体的な試みに即して考察することを目的としている。

本研究が具体的に研究対象とするのは、東南アジアにおける伝統的住宅生産技術のあり方と、現在、行われつつある、自助(Self-help), 相互扶助(Mutual-aid)を基本とする住宅建設プロジェクトのあり方である。また、その関連である。何故、東南アジア地域を対象とするかについては、第I章において触れているのであるが、東南アジア地域には、洗練された質の高い木造住宅が残されており、しかも、比較的閉じた系において独自のシステムを発展させてきた地域が多いこと、すなわち、文化的、民族的にも、また自然条件的にも極めて多様であり、極めて多様な住居のシステムをみることができているのがその

一つの理由である。そして、東南アジア（を含めた第三世界）において、より具体的に、土着的な技術を生かし、伝統的な共同体組織を活性化する形で、地域の生態系に即した住宅建設の試みがなされつつあることがもう一つの理由である。

東南アジアにおける木造住宅を支えた仕組みや、現在、模索されつつある住宅システムが、必ずしもストレートに日本の問題に結びつくわけではない。しかし、工業化、都市化によって、住居の画一化が進行してきた日本において、地域に固有な多様な住居のあり方が求められているとすれば、共通の問題をそこに見出すことができるはずである。東南アジアと日本は、歴史的にも、文化的にも交流があり、生態学的諸条件についても、殊に、南西日本とは共通性を持っている。日本における、産業化以前の住居を支えた仕組みは、既に解体され、大きな変容をこうむってきたのであるが、東南アジアにおける、そうした仕組みを明らかにすることは、日本のかつての住居を支えた仕組みを窺う上でも興味深いテーマである。そして、少なくとも、日本の住文化をアジアの空間的な拡がりにおいて捉え直すことは、西欧化、近代化の道を一辺倒に進んできたかにみえる日本の今後の住居のあり方を考える上で大きな意義を持っていると言えるであろう。

また、ヴァナキュラーな体系そのものの中で住居を捉えようとする、自助・相互扶助に基づく住居システムには、直接的にも、計画論の問題として学ぶべきものがあることも事実である。

本研究は、東南アジアを対象とすることにおいて、言うまでもなく、さらなる拡がりをもつものである。東南アジアの各地域において、今後、住宅や居住地がどうなっていくのか、われわれがそれをどう考えるかは一つの大きなテーマである。現在、住宅建設や都市計画に関しても、技術協力がなされつつあるのであるが、技術移転の問題、経験交流の問題は、研究を進めて行く上では、欠かすことのできない問題であろう。

本研究は、また、大きくは、わが国における東南アジア研究の一環として位置づけられるものである。建築や都市計画の領域における、東南アジアに関する研究は、戦後は、ほとんどなされておらず、われわれは、東南アジアの都市や住宅についての認識を欠いてきている。そうした状況において、本研究は、建築および都市計画の領域における東南アジア研究の一つの前提として、東南アジアの都市や住宅を概観する役割をもっていると言えるであろう。

本報告においては、そうした広範な問題の全てについて触れることはできないのであるが、全体を総論と各論の2部に分け、東南アジアの都市と住居を概観し、研究のフレーム、視点を明らかにした上で、現地調査に基づ

いて個別の事例を記述する構成をとりたい。本報告はその第一部に当たるもので、現地調査によって採取した図面をもとにして、東南アジアの住居を概観することにウェイトを置いている。勿論、概観するに十分な資料が得られているわけではないが、数次にわたる現地調査によって、ある程度それは可能となったと考えている。

I章では、地域の生態系に基づく住居システムをどう考えるかについて、概念規定、試論を示した上で、研究の目的、視点、フレーム、そして調査の概要についてまとめている。

続いてII章では、自然の生態系および親族原理を二つの主要な軸として、東南アジア地域を概観し、東南アジアの住居の伝統と地域特性、その文化的背景をわれわれなりにまとめた上で、住居形態・間取りと生活形態の関連、および、構法、生産技術の特性という二つの側面から、東南アジアの住居の類型化を試みている。

III章では、まず、東南アジアにおける植民地化、都市化に焦点を当て、東南アジアの都市、集落、住居の特性とその変化を問題にし、現在の都市の生態と構造、都市形成過程について整理した上で、都市住居(Squaccor Slum)の実態を具体的な地区に即して明らかにしている。

IV章では、東南アジアの各国における居住政策の概要とその問題点をまとめ、自助・相互扶助によるロー・コスト・ハウジングのアウトラインについて触れている。

本研究の一つの大きなベースになっているのは、東洋大学建築学科における「東南アジアの都市と住居に関する研究」のプロジェクトである。東洋大学プロジェクトは、78年に開始され、数度の現地調査を含めて、東南アジアの都市と住居を様々な角度（歴史、意匠、計画、構法）から研究しつつあるのであるが、本研究の位置づけにあたっては、大きくはそのフレームを参照している。また、本研究のメンバーは、既に、その一環として現地調査を行ってきており、特に、東南アジアを概観する上で、また、調査地域を選定する上で、それを踏まえている。東洋大学建築学科の、前田尚美、太田邦夫、上杉啓、内田雄造の各氏には、常に適切なアドバイスを頂いている。

本研究のもう一つのベースとなっているのは、安藤邦広、乾尚彦を中心とする、日本の伝統的住宅生産技術、生産組織に関する調査研究である。その研究は、南西日本における多雨地域（四国、九州、沖縄）および積雪地域（北陸、東北）を中心に、既に数年の蓄積をもっているのであるが、伝統的な住宅生産技術、組織に関する調査は、基本的には、日本と同様の方法を用いている。

本研究の遂行にあたっては、多くの人々の協力を得ている。東南アジア研究の現況については、京都大学東南アジア研究センターのセミナー（80年、81年参加）および研究交流（前田成文、高谷好一、石井米雄、小林和正、

矢野暢氏等)によって、そのアウトラインを得ている。  
また、倉田勇(文化人類学, 南山大学), 菊池靖(社会人類学, 早稲田大学) 村武精一(文化人類学, 都立大学), 中村孝志, 山本春樹(天理大学), 合田濤(神戸大学), 杉本尚次(国立民族博物館)の各氏には、現地調査のアドバイスを頂いたり、直接、紹介の労をとって頂いている。

国外では、S.Angel(Bangkok,A.I.T), Anuvit C.(Bangkok Silparkorn Univ.), G.V.Manahan(Univ.of the philippines), D.Sumintardja(Bandung.I.T.B.), D.Wardi-(Kualalumpur,I.T.M), R.Sularto(B.I.C.Bali), J.Silas(I.T.S), Y.Salia(I.T.B)の各氏との研究交流が有意義であり、大きな示唆をうけている。

また、J.Anzorena(上智大学)には、特に、アジア各地における自助・相互扶助による Housing Project および運動グループを紹介して頂くとともに、研究の方向性について一貫して示唆を頂き、また、具体的な調査の一部には参加して頂いている。金子勇次郎(国際住政策研究所)氏には、東南アジア各国の住政策について、御教

示を頂き、各国における文献収集のための便宜を計って頂いている。

本研究は未だその緒についたばかりと言っていいのであるが、まがりなりにも一つのパースペクティブを示し得ているとすれば以上のような多くの人々の協力によった故にである。末尾ながら感謝の意を記したいと思う。

## I 地域の生態系に基づく住居システム

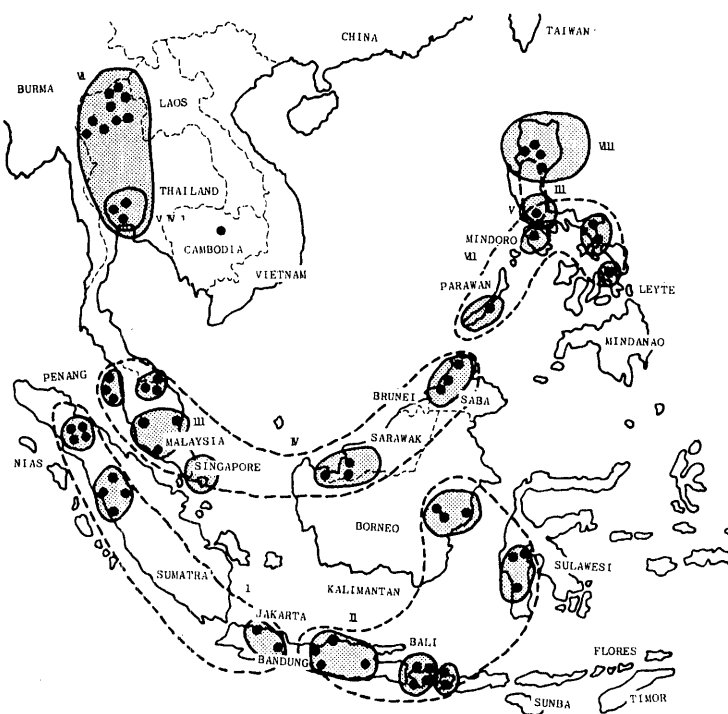
研究概要: A.自助・相互扶助によるロー・コスト・ハウジング

- 1.発展途上国における都市化, 大都市問題, 農村問題, 住宅政策などについて概観し, 自力建設・相互扶助による住宅建設の試みが具体化されつつある背景を明らかにする。
- 2.自力建設・相互扶助を基本とする住宅建設のシステムを中心に, ローコストハウスに関する文献を収集し, 問題点を整理する。
- 3.東南アジア地域において現在行われつつある各

|      | 国名          | 地域             | 都市              | 調査内容: 調査地                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            | 研究交流・文献収集                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|------|-------------|----------------|-----------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| V    | Philippines | Luzon          | Manila          | S:Tondo Foreshore, Barrio Escopa(SIR), Bagon Bayon St. Ana<br>P:Urban BLISS project(San Vicente, Q.C., Hulo, Mandaluyong)<br>Bagon Nayan (Antipolo), Sanbahayan Condominium<br>Maharika Village, Ang Bagong Lipnum Condominium<br>Dagat-Dagatan, Pag Asa Condominium, Lagro GSIS<br>P:Dasmariñas Bagon Bayan Resettlement project<br>Area A - Freedom to Build, Area C, Area E<br>P:Rural BLISS project (Tadlac)                                     | Institute of environment planning<br>L.A.Viloria<br>Uvib. of the Philip.<br>G.V.Manahan<br>Metro Manila Comm.<br>N.v.Einsiedel<br>PROS, MANOSA<br>N.I.S.T, A.S.Pesigan<br>MHS:J.U.Nierras<br>NHA:G.Lozada<br>PCHP:G.V.Tobias<br>NSAC:A.B.Ablon<br>F to B:W.Keyes<br>A.A.Catingdoy<br>B.T.:S.Angel<br>P.Chamniern<br>NHA :P.Buranasiri<br>SUO :C.Khao-Uthai<br>A.I.T., T.I.S.T.R. |
| VI   | Thailand    |                | Bangkok         | T:Ancient City<br>JimThompson's House<br>Ayutthaya<br>T:Ban Chang Thap Nam, Khayai<br>Wang Noi<br>Nakon Swan<br>T:Siraeha, Ladyao, Uthai Thani<br>Lakeside area<br>Sukhothai<br>T:Banwang Takhlo, Sihsachanarai, Utaradit, Phrae<br>Ngao<br>Lampang<br>T:Ban Mai Mae, Kulon Dam<br>ChaingMai<br>T:Donkaeu, Ban on Luay, Ban Pah Han, San Kamphaeng<br>Sanpayang, Sanpatun, Doi Touy<br>Chaingrai<br>T:Ban Tako, Hmong(Meo), Ahka, Lushu, Yao Village | Sumet Jumsai<br>Chularlornorn Univ.<br>M.Prateep<br>Silpakorn Univ.<br>C.Anuvit<br>T.Vivat<br>I.T.V.E.<br>S.Mongkol                                                                                                                                                                                                                                                              |
| VII  | Philippines | Luzon          | Manila          | T:Nayon Filipino<br>T:Abolan-Sagpaugan, Izumbo                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       | National Museum<br>A.E.Evangelista                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|      |             | Palawan        | Puerto Princesa | T:Calapan, Baco-Mayabic, Hanuno-Enbako, Bugayan<br>Lumngbayan, Nag-Iba                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               | Magan Museum                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|      |             | Mindoro        |                 | T:Abuyog-Dualg, Ormoc-Bayhagan, Jaro<br>Massin, Inopecan-Talisay, Baybay-Sabanz                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | Divine Word Univ.<br>Museum                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|      |             | Lyte           | Tacloban        | T:Legaspi<br>Sorsogon                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| VIII | Philippines | Northern Luzon | M.Prov.T        | T:Tococan, Mainit<br>Maligeong<br>Sagada                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|      |             |                | Ifugao Prov.    | T:Mayoyao<br>Banaue<br>Kiangnan                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |

|                         | 国名          | 地域                                  | 都市                                  | 調査内容：調査地（民族）                                                                                                                                                 | 研究交流・文献収集                                                |
|-------------------------|-------------|-------------------------------------|-------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|
| I<br>790131<br>790220   | Indonesia   | Jawa Barat                          | Jakarta                             | T:Tanan Mini,National Museum,Jakarta Bazaar<br>S:Glodok,Jembatan Lima,Kebon Kacang<br>P:KIP project,site & service low-cost housing:<br>Klender,Bekasi,Depok | B.I.C<br>Dr.T.Boen                                       |
|                         |             | Sumetra Barat<br>Sumetra Utara      | Padang<br>Medan                     | T:(Sunda)<br>T:Simanind,Tomok,Ajibata(Batak Toba) Siantar,<br>P.Purba(Batak Simalungun) Lingga(Batak Karo)<br>Bukit Barisan Museum,Medan Fair                | U.N.Regional Housing<br>Center                           |
|                         | Thailand    |                                     | Bangkok                             | T:Siam Society,Tompson's House Klong Tone Sai<br>S;Don Muan P:core house project,Building Together<br>project,public housing                                 | Asian Institute of                                       |
|                         |             |                                     | ChiangMai                           | T:(Meo),(Karen)<br>S:Malaysian Kampong P:public housing                                                                                                      |                                                          |
| II<br>790223<br>790323  | Indonesia   | Bali                                | Dempasar                            | T:Nyalan,Baturiti,Tenganan,Kintamani                                                                                                                         | British Museum:London                                    |
|                         |             | Kalimantan Timur                    | Balikpapan                          | T:Tanjungui,Tenggarong(Land Dayack)                                                                                                                          | Victoria & Albert Museum                                 |
|                         |             | Sulawesi                            | Ujung Pandang                       | T:Rantepao(Toraja)                                                                                                                                           | Musee de l'Homme:Paris                                   |
|                         |             | Jawa Timur<br>Jawa Tengah<br>Lombok | Surabaya<br>Semarang                | T:Mojokarta<br>T:Kudos<br>T:Sukaraya,Tanjung(Sasack)                                                                                                         | CeDRASEMI<br>Tropeu Museum:Amsterdam<br>(79.03.02-03.15) |
| III<br>790804<br>790820 | Philippines |                                     | Manila                              | T:Nayong Filipino S:Tondo<br>P:SIR project,site & service-core house project:<br>Dasmariñas,low cost housing:Quezon City                                     | Freedam to Build                                         |
|                         |             |                                     | Baguio                              | T:Imerda Park(Ifugao,Igorot),(Bontoc Igorot)<br>P:rural housing                                                                                              |                                                          |
|                         | Malaysia    |                                     | Kuala Lumpur                        | P:Subang Jaya,public housing T:Kuantan                                                                                                                       | Malaysian Institute of                                   |
|                         |             |                                     | Melaka                              | T: Seremba,Sri menanti(Minankabau)                                                                                                                           | Technology(Dr.Wardy)                                     |
| IV<br>800106<br>800125  | Malaysia    | Sarawak                             | Kuching                             | T:Sugu(Land Dayack),Mutan,Murat(Iban)                                                                                                                        | Kuching Museum                                           |
|                         |             | Sabah                               | Kota Kinabalu                       | T:Tanjungar,Sumblung,Monggabong(Bajau)                                                                                                                       | KotaKinabalu Museum                                      |
|                         | Thailand    | Kelantan                            | Kudat                               | T:Tinangor,Kadauwoyo(Rungus)                                                                                                                                 |                                                          |
|                         |             | Penang                              | Kota Bharu<br>Georgetown<br>Bangkok | T:Machang,Kualakrai,Laut<br>T:Pantai Acheh,Balic Pual<br>T:Ancient City,Yeso,Patumthani,Ayutthaya                                                            | Georgetown Museum<br>National Museum                     |

T：伝統的住宅 S：スラム・スロッター地区 P：プロジェクト



種プロジェクトに関する事例を調査(構法, 素材, 建設組織, プランニングおよびそのプロセス)し, 自力建設のための住居システムについて考察する。

## B. 伝統的住宅生産技術

1. 東南アジア地域における伝統的住居を捉えるための背景として, 文化的(民族, 主食, 生業等), 自然的(気候, 植生, 素材等)条件を整理分析し, その形態を中心とする類型について考察する。
2. 東南アジア地域における伝統的住居に関する文献(文化人類学, 社会学等の文献を含む)を収集整理する。
3. 伝統的住居に関する調査。1, 2にもとずいて, 東南アジア地域からいくつかの地域, 集落を選定し, その住居に関する伝統技術の採集を行う。
4. 採集された伝統技術をその背景となる条件(特に, 気候, 産材, 建設の組織や工具等)との関連で考察を行う。

## C. 地域の生態系にもとづく住居システム

A, Bをもとに, A, B相互の関連を考察しながら, 地域の生態系にもとづく住居システムのあり方について整理考察する。

### 調査概要

以下に調査概要を示す。自助・相互扶助によるロー・コスト・ハウジングに関しては, 研究交流, 情報収集が主体であるが, Freedom to Build, Building Together等については詳細な調査を行ない, また, 一部のスラム地区においてアンケート調査(調査票略)を行っている。伝統的住居, 集落については, 同じ調査票(略)をもとにしているが, 大きく三つのレベルにわけ, フィリピン各島調査(1ポイント2~3日滞在), タイ(Bangkok-Chaingrai)縦断調査(1ポイント1週間滞在), フィリピン山岳地方調査(2ヶ月滞在)を行っている。また, 前頁に, 東洋大学においてこれまで行った調査概要を示す。

## II 東南アジアの伝統的住居

### 1 東南アジアの自然と民族(生産基盤)

#### 1-2 生産基盤の分類

東南アジアと一口にいっても, その自然環境の相異に応じて, 環境形成作用としての住宅生産技術にも様々な形態がみられる。その対応の様子は, 特に産業化以前の生産方式を残す集落では顕著に認められる。この項では東南アジア全域についての概括的な理解を得るため, 背景となる自然環境の違いに応じてどのような生産がおこなわれることになるかを概説してみよう。それは, 住宅生産の違いから, それを含む生態系を分類する試みである。おおまかなスケッチにとどまらざるを得ないが, 東

南アジアにおこなわれてきた基本的な住宅生産の差異を認識するには役立つはずである。(分類は, 高谷好一教授——京大東南アジア研究センター——の所説によるところが大きい。ただし住宅生産の立場から, 再構成している。)

住宅の生産基盤という言葉, ここでは次のように定義する。実際の住居の形態・現実の住居の文化的伝統・歴史的変遷などの要素をすべて捨象し, ある土地にその自然環境に適応できる人間をおいてみた時, その人間がおこなう住宅生産は, ある種の自然環境の力を受けて方向付けがされるであろう。空間をそのような力を有する場としてみた時に, それを生産基盤と呼ぶ。本項の目的は, その力によって汎められる住宅生産の究極の型(生態学でいえば極相——クライマックス)そのものの詳細な記述をおこなうことでなく, 東南アジアの生産基盤が以下のような4つの典型的な形式に分類できることを示すことにある。

#### <1. 森林型 木の世界>

●木の鬱蒼と茂り, 一年中緑のたえることのない閉ざされた空間である。人々は常に木の背後に怯え, 親族で助けあい, 団結して行動する。その集団には, リーダーシップをとる人間が必要である。木は彼らを分断するし, また, 本来食物にめぐまれ水も得やすく住みやすいところなので独立した生業が可能である。そこでこれらの集団が相互に連帯することは難しい。

このような空間は, 概して山地民の居住地——大陸部の照葉樹林・針葉樹林, 島嶼部の熱帯降雨林のなかに見い出すことができる。狩猟採集または深い森の中で木を切って焼き払うことにより耕地を得る焼畑耕作が生業の主体となる。

●集落内部の結束の強さは, 住居・集落の形態にあらわれてくる。すなわち, いくつもの家族が巨大な住居に住む複合家族居住, 住居の連続した長屋居住がみられ, あるいは住居の配置にきわだった規則性がみられたり, 集落外部との境界が明確に示されることがあるのも, 木の世界の集落の特徴である。

小集落内で労働力をほとんどまかなうので, 固定的な関係の相互扶助となり, 時には有力者あるいはリーダーシップをとる者に労働力が集中するような不平等な形となることもある。概してそのような者の住居は, 集落のなかでひととき立派なものになる。

#### <2. 水利型 水を制する世界>

●農業用水が天水のみでは難しく, 河川を中心に灌漑施設を営むことになる地域である。水は天からではなく, 人から与えられることになる。定住性の高い水稻耕作を営み, 日本の多くの農村にみられるような水利慣行に由来するヒエラルキーを持った, まとまりのある集落を作る。場所に対する記憶から, 系譜を重んじる単系(父系・

母系) 社会となる傾向が強い。

このような世界は、乾期をもち天水依存の農耕が困難なモンスーン地帯にあらわれる。そこでしかも水を利することができるのは、大河川の本流やデルタ地域ではなく、山のふもとや扇状地や山間盆地などである。これらは東南アジアでは起伏の多い地形から小規模に分断され、集落はそれぞれ独立の傾向が強い。しかし、木の世界に比べれば開けていて、ヒエラルキーのある構造をもつ社会なので、中枢を制することさえできればいくつかもまとめて大きな集団にすることもできる。

東南アジアの延長と考えてよい中国南西部の国、南<sup>なんしやう</sup>詔は、7世紀なかば頃、高原のチベット・ビルマ系の人々が、大地の割れ目にたまった粘土の上で稲作をおこなっていたタイ族の集落を支配して打ち立てた国といわれる。武力によってまさに降臨することにより、ヒエラルキーがあるため中枢をおさえれば支配しやすい小集団をまとめたものと考えてよいだろう。

また、農業国家といわれるインドネシアのマタラム王国は、16世紀以来、中・東部ジャワに勢力をふるった。このような国家がこの土地に成立した背景には、熱帯降雨林の西部ジャワとは異なり、モンスーンの支配をうけ、水利慣行を有していたことがあげられるだろう。

●各世帯は集落のヒエラルキーのなかに組み込まれているが、同時にそれぞれは独立した存在である。また定住性が高く、これらのことから明確な境界を持つ屋敷地と屋敷地共住の形態が出現する。集落のまとまりはあるが、その境界は水の流れ方に応じてあいまいに終るので、木の世界のように明確なものではない。

定住性が高いことから、多くの人々の契約にもとづく期間の長い相互扶助がおこなわれ、耐久性の高い住居を作ることができる。また、建築を専業とする人間もあらわれる。

### ＜3. 湛水型 押しよせる水の世界＞

●農耕をおこなうための水にめぐまれ、特別の灌漑施設を要さないか、あるいは押しよせる水の力があまりにも強く、人間の力を圧倒しているので、水の変化に応じた生活形が形成されている地域である。水を制するための共同は、その豊富な水量と巨大な力の前には意味がなく、

おこなわれない。したがって親族で固まることも共同体の規制も少なく、各人が独立の傾向が強い。むしろ状況に応じたその時々<sup>そのとき</sup>の連帯が必要になり、系譜を重視しない双系社会となる。

東南アジアで天水依存率の高い稲作をおこなっているのは、概して島嶼部の平野や山間盆地の水田地帯にみられる。また、人間の力を圧倒する水が押しよせてくるのは、大陸部の大河川地域のうちで、多くの支流を集めたあとの低地および分流を生じたあとのデルタである。ここは、乾期には陸地であっても雨期には巨大な集水面から集まった水で一大湛水地帯となり、景観は一変する。人々は自然堤防や微高地の上に住み、浮稲のように増水に適した作物による農耕がおこなわれる。この両地域とも、概して視界の開けた世界である。また、各自が自立し、周囲の人間に依存する度合いが低いということは、南方上座部仏教のような個人主義的色彩の強い宗教を受け入れやすいものと考えられる。

●集落は中心を欠き、他の集落との境界が明確ではないことが多い。結婚後新たな土地で生活を始めることが簡単に核家族居住が基本になるが、土地が不足すれば容易に凝集されて拡大家族居住がおこなわれ、住居の規模も一定しない。

建設に際して、各自が独立していることから、その時々<sup>そのとき</sup>の契約（成文化していないものも含めて）にもとづく相互扶助がおこなわれることになる。各自が独立に居住地を変更することが多いので、多人数で長期間組織を存続させる形式ではなく、2人の間でとり結ぶ契約となる傾向が強い。施主が多くの人々とそれぞれ独立にこの契約を結ぶことによって必要な労働力を集めるのである。

### ＜4. 海洋型 海の世界＞

●漁撈や船による交易のおこなわれる世界である。農耕もおこなわれるが、湛水型のため、共同体をまとめる要因にならない。海も万人に対して開け、各自はその恵みによって独立しているが、湛水型と異なり漁撈は共同作業を必要とするので固定した組織を保つ傾向が強い。しかしこれは水利型にみられるようなヒエラルキーのある構造ではなく、各自は対等の立場で組織に参加するのである。

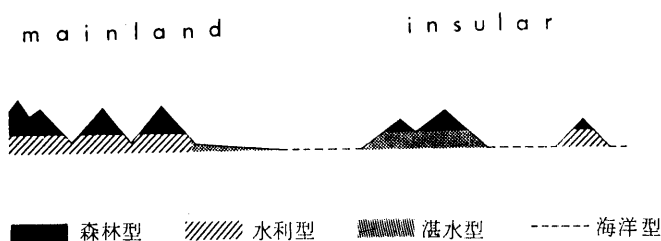


図4 東南アジアの生産基盤の模式

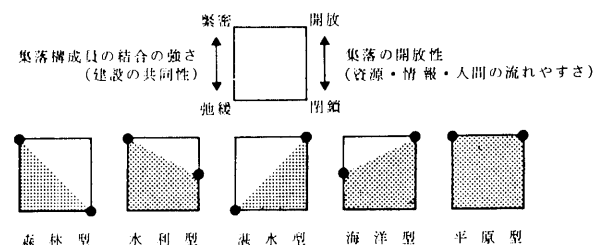


図5 生産基盤比較

島嶼部の海岸付近がこの地域にあたる。海はしばしば広大な地域を結びつけ、交易によってひとたび有力者に富が集中すると、歴史上シュリーヴィジャやマラッカ王国はじめ数多くの例に示されるような国家が形成される。また、広大に開け、はるかかなたと結びつけられた空間は超越者の存在を予期させ、一神教を受容させる基盤となる。インド洋をモンスーンを利用してさかんに往来した交易者の影響を受け、同じく視界の開けた砂漠を起源とするイスラム教が島嶼部に普及したのは、この海の世界を通してである。

●海岸付近に居住するため、海水・暴風に対する住居の工夫が必要とされる。スング・シェルフ周辺のようにおだやかな海では、マングローブの茂る陸上をさけ、屋形舟で漂海する水上居住もおこなわれる。

基本的には各自が独立しているが、固定的な共同漁撈の必要は、まとまりのある集落を生む。建設もこの集落が基本となり、おおむね全員が参加する形式になる。ただし集落のまとまりはあっても等質な人間の集まりであるため、専門分化はおこりにくい。

以上で分類された生産基盤は隣接するもうひとつの世界——平原型を考えることで、より特徴が明確になる。それは複雑な地形や木で囲われることのない広がりを持つ世界であり、東南アジアをはさむインドと中国がこれに該当する。

この平原の世界は、本来農業の生産基盤が貧弱であり、水利慣行によって結ばれる集落はしばしば壊滅の危機に頻する。孤立の力が弱く、見通しのきく平原を疾駆する力によって容易に支配され統合される。このことから、情報も物資も移動しやすい大文明が生まれることになる。専門分化が進み、高度な技術が発展して、ついには専門家集団が形成される。貨幣などによる報酬がおこなわれ労働交換のような相互扶助がみられなくなるまでに発展していく。

東南アジアの生産基盤の特色は、このような統合がおこなわれにくい分断した社会を背景としていることに求められよう。ただし近代国家の成立した今日では、この差違も平原化の侵透のためあいまいなものになってきている。

以上のまとめとして、集落構成員の結合の強さ、集落の開放性の2点から、図5に各生産基盤を比較しておく。

## 2. 住居形態の類型

ここでは主として農・山・漁村で、比較的土着的な建築文化を引きついできた民族の住居および集落の形態を対象とし、その類型化を試みる。外来文化や技術の導入により、また人々が職を求め都市へ集中する中で、東南

アジアにおける住居や集落は大きく変容しつつある。しかし、他方都市から遠く離れた農・山・漁村の住人は都市からきた商人や出稼ぎを通じて、外来の文化や技術に接するが、その住環境に急激な変貌はなく、集落や住居は伝統的なたたずまいを今でも見せているほか、住人の生活や生業も急速な変化はなく、都市とは異なり自律した住環境と生活構造を維持していることも事実である。比較的閉じた住居—集落のシステムは東南アジアにおいて極めて多様であり、それを類型化することは容易ではないが、一つの試論として、概観することにウェイトを置いている。

類型の対象としたのは、具体的に調査を行ったものを中心としているが、民族の親族原理や社会構造については民族学・文化人類学の文献資料を参照している。

### 2-1 類型化の視点

地域や自然条件が異なり、文化的背景や慣習も違う民族の住環境や生活構造は多種多様であり、また単一民族の中でも、その構造は地域的に少しずつ差が存在している。ここでは東南アジアの各地域に住む民族の中から、東南アジアに一般に存在する住居形態と生活構造を捉えた上で、次の概念枠で類型化を行い、概要をみてみたい。

本稿では住居形態と生活構造を含めたものを居住システムと呼ぶ。住居形態は住居や集落そのものの形態を扱うほか、その内外での使われ方、それに関わる性能、つくり方に結びつく建設組織などを含むものであるが、ここでは人々の住い方（居住形態）と住居の集まり方（集合形態）を軸とし考察する。生活構造は家財の継承、結婚後の居住形式、家族構成と住居、日常生活に関わる生業、社会構造などを含むものであるが、ここでは親族原理、家族形態、生業を軸とする。これらはそれぞれが自立し、居住システムを構成するものではなく、相互に絡み合うと同時に、周りの地形や自然条件を含めた生態系と対応する中で幾つかの居住システムを形成するものである。

#### I 親族原理

土地・家・家財などの財産は、一般にその民族の持つ生活慣習によって子孫に配分される。家（屋敷地を含む）の継承を軸に、東南アジアの民族にあらわれた親族原理の仕組みをみると、幾つかに類型化できる。

イエ筋を形成する民族の親族原理は一系制及び双系制の2形式があり、一系制は父系・母系に分かれ、家を引きつぐ人の性があらかじめ定まっているところに特徴がある。この形式はスマトラ島とバリ島の人々にみられる原理で、東南アジア全体では一般に少ない。父系は長子（男）または末子（男）のどちらか1人に相続権があるのが普通で、母系は既婚女性のすべてに継承権がある。一系制と云えども、その親族原理の仕組が異なるスマトラ

島では住居形態や規模にも明確な差が現われ、一般に父系は形態の変化がなく、母系は変化し、規模が大きくなる。

双系制は選択の要素が残り、長子―末子、または男一女どちらが住居を引き継いでもよい二者択一形式で、東南アジアでは一般的な親族原理である。双系制では、相続者以外は必ずしも他の土地に家を建設するのではなく、敷地に余裕があれば、直系親族が棟を違えて（接して）共住する事も可能で、屋敷地（土地）の相続に厳密な規則はなく、曖昧な構造を持つ。

耕地の近くに住居を建設する。住居は数年毎に建設するもので、財産として家を継承することではなく、また土地も私的占取をするにすぎず、所有権の概念すら持たない。

家（屋敷地）の継承と親族原理を通し、類型を行うと、大きくは5つに分かれる。尚、一系制で屋敷地を共有する。又は家を相続しない形式は考えられるが、調査の範囲では具体的例をみることができなかった。

- A) 一系制で男性が家を相続する……バタック・トバ、バタック・カロ、バリ。
- B) 一系制で女性が家を相続する……ミナンカバウ。
- C) 双系制で長子が主に家を相続する……ルングス、トラジャ、イフガオ。
- D) 双系制で長（末）子が家を相続し、直系親族の一部が屋敷地に共住する……マレー、タイ、パラワン（新）。
- E) 双系制であるが家を相続の対象としない……アランガン、パラワン（旧）。

## II 家族形態

世帯とは、同じ家族関係のあるもののうち、日常の共同生活を営む最小単位で、その成員の数は普通4～6人程度である。一住戸（一住棟）に一世帯でなく、複数の世帯が同居し、一家族となる集合的構造を持つものも、東南アジアでは少なくない。複数の世帯が共住する住まい方は、必ずしも貧困や部族間の斗争のため集まって住むのではなく、生態系への対応、生業に関わる労働力、親族原理等にも原因がある。一住戸（又は一住棟）内に住む世帯の数および血縁のつながりから、家族形態をみると幾つかに類型できる。

一世帯一家族は東南アジアの至る所で散見され2世代（夫婦と子供）が同居する家族形態で、なかには孫を加え、3世代が同居するものも少なくない。世帯が対社会的に自律した最小単位で、経済的に独立した生計をたてる。

複数世帯からなる家族は、血縁でつながることが、普通で、地縁で結びつき共住することは少ない。一般に家長またはリーダーが家族を統括し、集団内の秩序と平和を保つ。複数世帯一家族は、結婚後の居住方式があらかじめ定まる例の他、生業を行う上で、人手を多く要する場合にとられる住まい方で、農耕民に特に多い（例え

ば焼畑粗放農耕等）。この住い方は世帯数の少ないものと、多いものに分けられ、後者は一般に大家族と呼ばれる。

血縁でつながるもののうち小規模な形態は内陸や海岸地帯の平野部に多く、双系制の親族原理をとるものも多く、住居規模も核家族住居に比し、それ程大きくはない。多数の世帯からなるものは山間部に多く、親族原理は一系制をとるものも少なくない。また住居規模も大きく、巨大な家屋になる傾向にある。ここでは前者を複数一家族と呼び、後者を大家族と呼び類別する。

多数の世帯が共住する例は密林地帯で多く見い出せる。それぞれの世帯は経済的・社会的に自立した核家族で、住戸内の生員がお互いに助け合い、狩猟や農耕を行う。一般に双系制の親族原理を持ち、住居は長大な事が多く、住棟内への加入・脱退は比較的自由である。ここでは文化人類学と同様に合同家族と呼ぶ。

世帯数や血縁・地縁による結びつきから家族形態を類型すると次の如くなる。

- a) 核家族……トラジャ、マレー、タイ、パラワン（新）、イフガオ、バリ。
- b) 複数一家族（小規模）……マレー、タイ、パラワン（旧）、バリ（新）。
- c) 大家族……ミナンカバウ、バタック・トバ、バタック・カロ、アランガン。
- d) 合同家族……ルングス。

## III 生業

東南アジアの農・山・漁村に住む人々は一般に生れた土地で行なわれる産業に就くことが多く、職・住が接近するのが一般的である。風土条件や土地性状（土地の地味や高低・漁場としての好・不適等）の差異によって、生業形態や生産形式は様々で、同一民族でも住まい方が異り、多種多様な住居が見られる。生業形態・地形を中心に生業をみると幾つかに類型化できる。

立地を大きく分けると、平野・山間・海・及び河川を含む海岸沿岸の4地帯に分かれる。生業は主として農業と漁業が専門に行われ、内陸の河川沿いや海岸沿岸では半農半漁を行う人々も少なくない。住い方は一定の場所に居を定める定住と、ある期間毎に移動を繰り返す、その都度住居を建設する移動住、漁をしながらか一定期間、なかには毎日漂流する漂流住（浮床住居やボート・ハウス）などがある。ここでは居の定まらぬ、漂流住は対象から除く。

農業は定住・移動に関わりなく大多数が行うのであるが、定住者と移動者では耕地・農耕形態に違いがみられる。移動者の耕地は山間部や密林地帯の自然の原野を対象とし、耕地は一定せず、2～3年毎に放棄されることが多い。生産は主として人力にたより、広い面積と多数の労働力が必要な粗放農耕の焼畑耕作をほとんどが行っている。



る。陸稲の他、野菜やキャッサバを栽培するが、一般に収穫量は少ない。また耕地が遠方の場合、出づくり小屋を建設し核家族や複数地帯の生員がある期間移り住むことも希に存在する。

一方定住農業を営む人々は東南アジア全域でみられ、耕地の開けた平野部に特に多く、常畑化した水田や畑から稲を主に生産するほか、野菜や豆などを栽培する。また、マレー族の一部では換金作物のゴムを収穫する。なかには二毛作や二期作を行う人々もあり耕地からの生産量は、移動者に比し、面積当りの収穫量は断然多く、収穫された粳や穂づみの稲は、ねずみのいる住居をさけ、特別に貯蔵庫（米倉）を建設する事が多い。農耕は人力のほか、水牛などの蹄耕も行われ、かつて住居床下で飼育していたが、今日では蓄舎などの施設を設けるものも少なくない。山間民族の一部は常畑耕作のほか焼畑耕作を併せ行うこともあり、定住イコール常畑とは云えない。

漁業は海岸の近くで行う沿岸漁業や河川で行う小規模な漁業形態が多く、漁民が水上又は岸辺に住居を建設し、定住生活をおくる。中には、移動耕作民のように水陸は異なるが、海上に出づくり小屋を建設し、穴のあいた床下から魚網を降ろし漁を行う人々もいる。

生業形態・地形を通して東南アジア民族の生業の類型を行うと次のように分けられる。

- イ) 平野一定住一常畑……マレー、タイ、パラワン、バリ
- ロ) 山間一定住一常畑……ミナンカバウ、バタック・トバ、バタック・カロ、ルングス、トラジャー、イフガオ
- ハ) 山間一移動一焼畑……アランガン、ルングス、トラジャー
- ニ) 海岸（河川）一定住一漁業……バジャール（チャイニーズの一部）
- ホ) 海（河川）一移動一漁業……（オラン・ラウト、チャイニーズ、バジャール）

#### IV 居住形態

各世帯の占有する居住空間は千差万別で、質・機能・面積・規模・ヴォリュームなどは様々である。ここでは各世帯が専有使用する居住空間に注目し、世帯数の組み合わせと室内空間の形状から住居を類型化し、居住形態（すまい方）をみる。

大まかにみれば東南アジア各世帯の占有空間は、(ここでは居住単位とよぶ)我々の見た範囲では次のように分かれる。a) 占有する場はあるが間仕切壁のない一室空間、b) 間仕切壁で仕切られた専用空間と、仕切られない共用空間がユニットとなるもの、c) 居住単位が1棟の住居で室内が機能分化し、複数の居室からなるもの、d) 機能分化が建物にまで生じ、複数の建造物からなるもの。

a)の形態は2形式からなり、一居住単位が住居そのものである場合と複数の居住単位が集合し、住居を形成するものがある。一つの居住単位からなる住居は、一般に規模が小さく、一室空間を機能毎に使い分けている。この形態は平野部より山間域に多く、民族毎に定まった形式を持つものが多い。複数の居住単位からなるものは血縁で結びつく大家族が一般的で住居は巨大なことが多い。その場合、あらかじめ建築形態は完成されており、成員の増加により居室が増築される事は少なく、一般に住み分けることが多い。各世帯の占有面積は、大家屋の世帯数によりばらつきがあり、一定しない。この形態はスマトラ島やミンドロ島の山間地帯などでみることができるが数は少ない。

b)の形式は、既存住宅（又は住棟）に接続する形で増築が行われ、住居（住棟）規模に変化が生じる。この形式は大家族（母系）の一部及び合同家族に見られ、特にボルネオ島の密林地帯に多く、長さが150Mにおよぶものがあつた。

c)形式は一般に食寝を分離するものも多く、この形式の住居は外観形態を始め、平面構成も複雑で、地床または高床の平家建てである事が多い。核家族だけでなく、婚姻関係のある複数の家族が壁を接して同居することも少なくなく、東南アジアでは最もポピュラーな居住形態である。

d)の形式は、機能分化が建物に及んだもので、一般に建物の規模は小さいが、大陸部では必ずしもそうではない。昨今では屋敷地の離れに台所棟を建設する事が多く、食事が別空間で行われる傾向があり、中には子弟の性別毎に建物を分離建造するものや、別の屋敷地に建物を建設することもある。屋敷地には血縁でつながる複数家族が別々の建物で共住する事もあるが一般に核家族が住む。

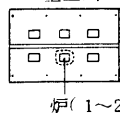
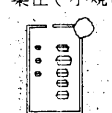
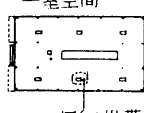
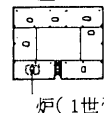
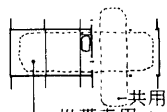
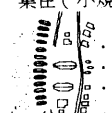
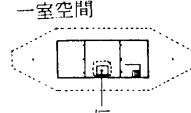
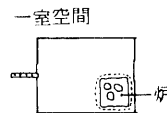
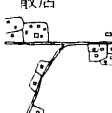
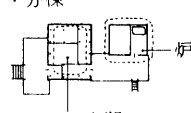
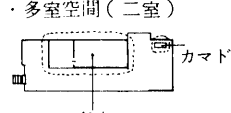
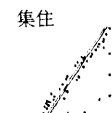
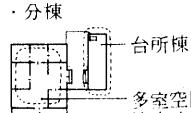
伝統的住居を持ち、特徴ある各民族毎の居住単位を中心に居住形態の類型を図ると次の如くなる。

- 1) 各世帯の居住単位が定まり、多数の世帯(家族)が共住するもの……ミナンバウ(大家族)、ルングス(合同家族)
- 2) 一室空間で、大家族が共住するもの……バタック・カロ、バタック・トバ、アランガン。
- 3) 一室空間で核家族が住むもの……トラジャー、イフガオ。
- 4) 室内が機能分化し、複数の居室からなるもの……マレー、タイ、フィリピン、ジャワ。
- 5) 複数の建物からなるもの……マレー、タイ、バリ。

#### V 集合形態

集落は複数の住居が集合し共同社会としてまとまりをもつもので、立地、規模・生活習慣などからも集まり方の形態は様々である。ここでは行政上まとまりを持つ行

東南アジアにおける居住形態の類型

| No.  | 居システム | 民族(親族組織)<br>地域・村落                           | 集落の構成<br>(集落形態)(構成要素)                                                                                                      | 生産(生業)の形態<br>(生業形態)<br>(生業に関わる施設)        | 住居平面システム                                                                                                                              | 備考                                                                            |
|------|-------|---------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| I    | 大家族共住 | ・Minangkabau (母系)<br>・西スマトラ<br>・Bukitingi   | 散居<br><br>・集会所<br>・モスク<br>・伝統的住居<br>・米倉   | ・定住常畑水田耕作<br>・米倉アリ                       | 多室空間 基本プラン<br><br>(9本柱)(12本柱)<br>一世帯用スペース<br>共用スペース | ・Payung (共同体血族集団)アリ<br>・住居システムアリ<br>・隠居家アリ<br>・分家はDiuraiと呼ばれる<br>・未婚男性は集会所で寝る |
| II   |       | ・Batak Karo (父系)<br>・北スマトラ (カロ高原)<br>・Linga | 集住<br><br>・伝統的住居<br>・米倉<br>・脱穀所<br>・納骨棟   | ・定住常畑水田耕作<br>・米倉・脱穀所アリ<br>・床下に農耕牛飼育      | 一室空間<br><br>炉(1~2世帯使用)                              | ・住空間にヒエラルキーアリ<br>・4~12の世帯が住む<br>・未婚男性は米倉で寝る                                   |
| III  |       | ・Batak Toba (父系)<br>・北スマトラ<br>・Tomok        | 集住(小規模)<br><br>・伝統的住居<br>・米倉<br>・土堀       | ・定住常畑水田耕作<br>・米倉アリ<br>・床下に農耕牛飼育          | 一室空間<br><br>炉(1世帯専用使用)                              | ・住空間にヒエラルキーアリ<br>・4~6の世帯が住む<br>・未婚男性は米倉で寝る                                    |
| IV   |       | ・Alangan (双系)<br>・ミンドロ (フィリピン)<br>・Bugayan  | 散居<br><br>・伝統的住居                          | ・移動焼畑耕作<br>・出ズクリ小屋                       | 一室空間<br><br>炉(1世帯専用使用)                              | ・3~20世帯が住む                                                                    |
| V    | 長屋共住  | ・Rungus (双系)<br>・サバ(マレーシア)<br>・Tinangoi     | 集住<br><br>・伝統的住居<br>・マレー式住居<br>・木柵      | ・定住・移動焼畑耕作<br>・出ズクリ小屋                    | <br>一世帯専用スペース<br>共用スペース                           | ・住居システムアリ                                                                     |
| VI   | 核家族住居 | ・Sadan Toraja (双系)<br>・中央・南スラウェシ<br>・Nagara | 集住(小規模)<br><br>・伝統的住居<br>・米倉<br>・ブギス式住居 | ・定住常畑水田耕作 (一部焼畑耕作)<br>・米倉アリ<br>・床下に農耕牛飼育 | 一室空間<br><br>炉                                     | ・直系親族が家を継承する。<br>・軒下で米を脱穀する                                                   |
| VII  |       | ・Ifugao (双系)<br>・北ルソン<br>・Banauei           | 散居<br><br>・伝統的住居                        | ・定住常畑水田耕作                                | 一室空間<br><br>炉                                     |                                                                               |
| VIII | 屋敷地共住 | ・Palawan (双系)<br>・南パラワン<br>・Izumbo          | 散居<br><br>・集会所<br>・モスク<br>・伝統的住居<br>・米倉 | ・定住常畑水田耕作 (一部焼畑移動耕作)<br>・米倉アリ            | ・分棟<br><br>一室空間<br>炉                              | ・直系(母系)家族同居 (または屋敷地近接共住)                                                      |
| IX   |       | ・Thai (双系)<br>・中部タイ<br>・Yeso                | 集住<br><br>・寺<br>・伝統的住居<br>・米倉           | ・定住常畑水田耕作<br>・米倉アリ                       | ・多室空間(二室)<br><br>カマド<br>寝室                        | ・核家族独立住居 (または屋敷地近接共住)                                                         |
| X    |       | ・Malay (双系)<br>・西マレーシア<br>・Machangu         | 集住<br><br>・モスク<br>・伝統的住居<br>・米倉(一部)     | ・定住常畑水田耕作<br>・一部米倉所有                     | ・分棟<br><br>台所棟<br>多室空間<br>接客空間                    | ・直系家族同居 (または屋敷地近接共住)                                                          |
| XI   | 屋敷地分棟 | ・Bali (父系)<br>・バリ<br>・Nanan                 | 集住<br><br>・寺<br>・集会所<br>・伝統的住居<br>・米倉   | ・定住常畑水田耕作<br>・米倉アリ                       | ・分棟<br>                                           | ・核家族分棟居住 (または屋敷地複数世帯分棟居住)                                                     |

政村を扱うのではなく、景観上一群を構成する集団間の住居(屋敷地を含む)を対象とし、その集まり方や規模・土地制度などから集合の形態をみる。

集合の形態は大きく分類すると、a)住棟(住居)が1棟からなるもの、b)数棟の住居が集合するもの、c)多数の住居が集合するもの、d)数棟の屋敷地が接するもの、e)多数の屋敷地が接するもの、f)屋敷地や住居が離ればなれのものの6形態に分かれる。

a)~c)の形式は集落内の土地所有は不明確な場合が多く、東南アジアでも山間部に多い形式である。それに反し、d)~f)は一般に屋敷地を所持するもので、平野部で見かけるものが大分この形態である。またa)及びb)の一部は耕地が定まらぬ焼畑移動民に多く、b)の一部かけc)~f)は常畑で定住生活をおくる人々の集合形態であるといえる。

a)の集合形態は各世帯の居住単位が接続し、直線状に連続・拡大するもので、複数の世帯が1棟の住居内に居住する。これは、合同家族の居住形態で、結合の中で共同社会が形成される。単一世帯で共同体としての集落を形成することはなく(家族としての単位)、複数世帯の存在が条件である。原則的には一棟一集落の集合形態をもつもので東南アジアでは一般に少ない。b)の形式はa)の集合形態が幾つかに分離するなかで表われるものと、集落としての適正規模があらかじめ、住民間で定まり、少数棟で集落を形成するものがある。c)の集合形態は多数の住民が近接し、集住するもので集落の成員は血縁でつながることが多い。山間部でも地形に恵まれる平坦地に多い集合形態である。d)はb)の形式の家族がそれぞれ専用の屋敷地を持つもので、この2形態は小規模な集落や部落が散居村の如く、点在することが多い。e)の形式は道路や水路を軸に各家族の屋敷地が連続するものや、塊状に屋敷地が接する形態などで農・山村では一般に少ない形式である。

f)の形式は広い耕地内に住居を建設するもので、散居形態をとり、職住が一致または接近する。耕地の開けた平野部で一般に多く見受けるが、山間部では必ずしも耕地と一致する例は少ない。

集まり方と規模から集合形態の類型をみると次の如くなる。

- 1) 一棟又は複数棟(少数)の集合(土地所有なし)  
……ルングス、アランガン
- 2) 数棟の集合(土地共有)……バタック・トバ、トラジャ
- 3) 多数棟の集合(土地所有なし)……バタック・カロ、イフガオ(小規模)
- 4) 屋敷地の集合(大規模)……マレー、タイ、バリ、ミナンカバウ
- 5) 屋敷地の集合(小規模)……パラワン

## 6) 住居(屋敷地)の散在……東南アジア一般

### 3. 住宅の構法類型

#### 3-1 類型化の方法

##### 3-1-1 類型化の対象

東南アジアをはじめとする発展途上国の住宅には、現在でも地域の気候や風土を反映しながら、住宅の使用材料及び造り方などに、土着的な構法技術を保持しているものが多い。それらの住宅は、必ずしも一様でなく、生態学的背景や文化的背景の差異において、地域や民族で大きく異なっている。東南アジアの住宅構法を、その工業化、都市化の経過に応じて大きく分類すると

- イ) 現在でも、地域の生態系に順応しながら、土着的な構法技術を保持している住宅。
- ロ) 都市化、工業化の影響を受けながらも、建物の主要な部分については、土着的な構法技術を保持している住宅。
- ハ) 都市化、工業化の影響を受け建築材料や構法技術が変化してきた住宅。
- ニ) 新しく導入された構法で大型パネルなどを用いて造られる工業化住宅。

の四つに分けられるが、その差異は必ずしも明確ではなく互に重複しながら共存しているのが現状である。

イ)タイプは、住宅の素材、構法、生産技術のすべてが、地域産材を利用し、プリミティブな架構技術で、自力建設、又は村落組織の相互扶助で行われている原始農耕社会(焼畑農耕民)の住宅に多い。ロ)タイプは、イ)タイプの発展段階の延長上にあり、移動から定住化への途中、又は既に定住化が進み都市との交流が行われ、その影響で一部材料の移入が始まりつつあるが、その主要な部分は土着的な構法を保持している住宅で、都市近郊農村社会に多く見られる。ハ)タイプは、生活の大部分が都市商品経済と深く結びついた都市近郊の住宅に多く、給与者住宅及び公共住宅の部類が相当する。ニ)タイプは、国家や民間組織の中で新しい住宅生産方式を模索しながら行われつつある住宅で、その事例は数少ない。一方、住宅構法の変革期を、産業化以前と以後に分けて考えれば、イ)とロ)の初歩的段階が以前で、ロ)の相当進んだ部分、ハ)、ニ)が以後と言うことができる。ここでは、東南アジア地域で比較的濃厚に土着的構法を保持していると思われるイ)、ロ)、ハ)タイプの木造住宅を対象とし、その住宅の主架構及び部位別構法の類型と、その地理的分布を明らかにしながら東南アジア木造住宅の在来構法の実態を、概観しようと思う。

##### 3-1-1 類型化の留意点

東南アジアの住居については、従来は文化人類学、地理学、考古学などの分野で、民族や生活面から見た研究

は試みられてきたが、住宅そのものに焦点をしばった研究は限られた事例を除いて非常に少ない。特に、住宅構法に関しては皆無に等しいと言える。この様な状況の中で、住宅構法の類型化を試みる場合、次のことに留意すべきである。

- a) 土着的な住宅構法に関する年代別の記述文献は、皆無に等しい。更に東南アジア地域の構法実態も不明な点が多く、類型化の方法は仮説試論にならざるを得ない。
- b) 素材に関しては、近代の材料であるコンクリートブロック等を除けば、材料面から土着構法か移入構法かの判断は極めて困難である。
- c) 東南アジアの住宅架構は、プリミティブな段階のものが多く、またその架構形態も実に多様で、それぞれの個別構法で類型化するより、建物全体の荷重支持原理で把握する方が類型化が容易である。
- d) 住宅の部位別構法も、変化型が多く、部位部材の機能概念も日本における一般構法概念で説明不可能なものも多い。

### 3-1-ハ 類型化の方法

東南アジアの住宅構法を把握する為に、建物を全体構法と部分構法を分け以下の順序で類型化を行なう。

ST 1：全体構法では、屋根及び床の荷重支持方式に注目し、主架構原理の類型化を試み、その地理的

分布を明らかにする。(主架構の原理)

ST 2：主架構の原理によって得られる主架構の類型を各部構法の組合せによって下位分類し、基本型を抽出する。また、その地域性についての考察を行なう。(主架構の基本型抽出)

ST 3：主架構の基本型に基づき、その具体例をそれぞれアイソメ図化し、建物別にその構法実態及び生産的側面より概説する。

ST 4：部分構法では、部位別及び材料別にその類型化を試み、地理的分布を明らかにする。

以上は、既に述べたように主に土着的な構法を保持していると思われるイ)、ロ)、ハ) タイプの木造住宅と一部米倉を含めたものに限定して行なう。基礎とする資料は、現地調査で採集した資料60件を中心とし、これに文献より構法解析のできる資料34件を補充した総数94件である。但し、同一地域内の同タイプのもは一件に制限した。図との対応東南アジアの多様な住宅構法や地域特性を正確に分析するには、必ずしも十分な資料数とは言えないが、大まかな把握は可能と思われる。また、建物の年代差や階級差などは考慮しないため、分析結果が必ずしも正確な構法差や地域差を表わすとは考えられない場合もあり得る。

今後、より正確な資料が採集できれば、より正確な東南アジアの構法別、地域別の分析を通して住宅構法の実

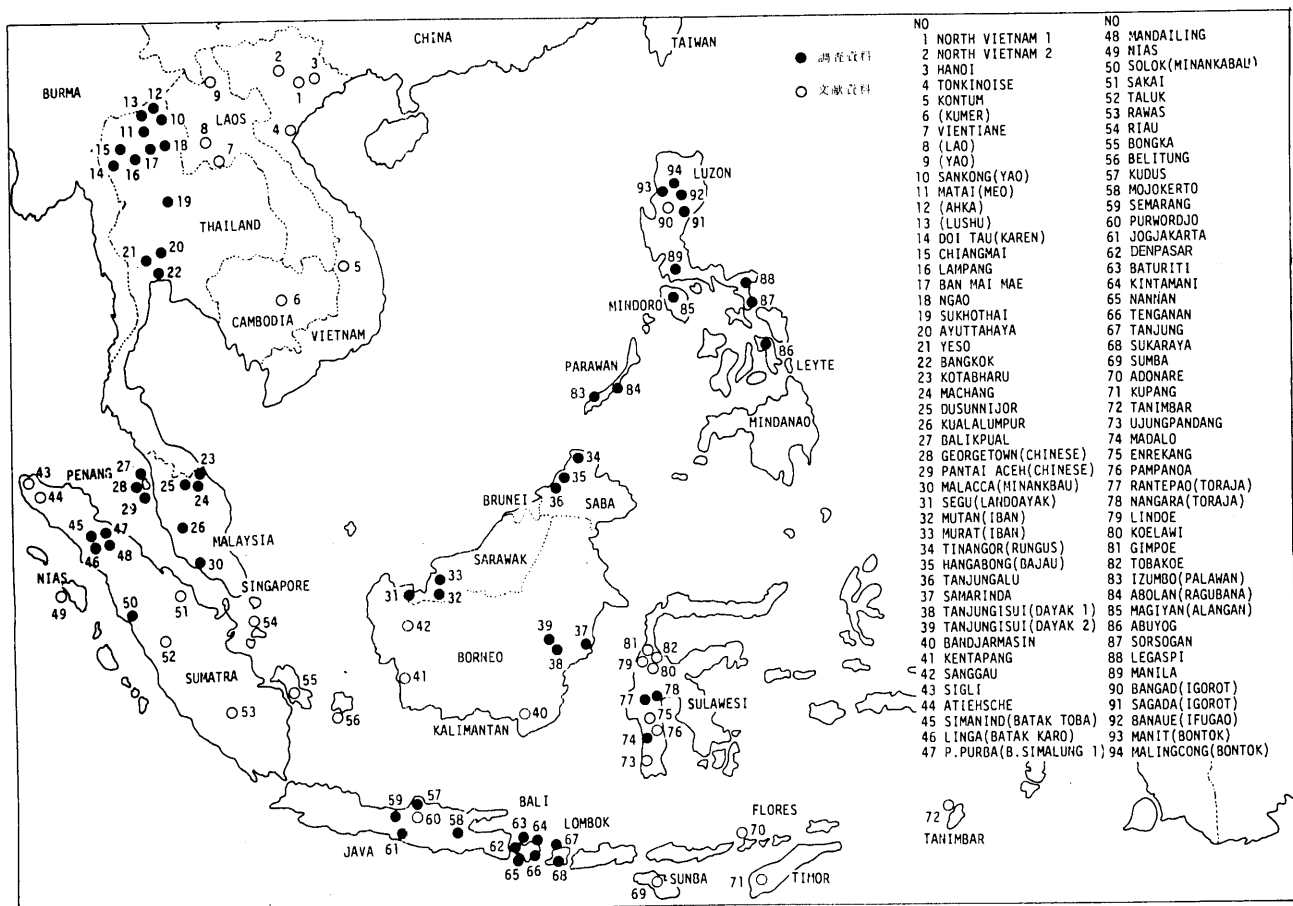


Fig-1 調査地点及び資料リスト

態が把握できるはずである。

### 3-2 主架構の類型

#### 3-2-1 主架構の原理

主架構の類型化は、最も重要な部位である屋根、及び床の荷重が地盤面までどのような方法で、支持伝達されるのかに着目し、またその原理をまず分類することを視点としている。基本的には、屋根及び床の荷重を支持伝達する機能部位は軸組である。即ち、軸組の主要構成部材である柱と梁、桁などの横架材が、各々の荷重をどのようなシステムで支持伝達するか、という荷重支持原理で主架構を大きく分類している。但し、高床を持たない地床住宅の場合は、屋根荷重の支持方式のみが分析の対象になる。原理的に考えられる荷重支持伝達システムは、A構法：通し柱と横架材で、屋根及び床の荷重を同時に支持伝達する方式。

B構法：上部荷重は、すべて床下の束柱で支持され、屋根荷重は床上の管柱と横架材により支持される。即ち、個々の荷重を管柱と束柱で間接的に支持伝達する方式。

C構法：通し柱と棟持柱のみで、屋根及び床の荷重を同時に支持伝達する方式。

D構法：上部荷重は、すべて床下の束柱で支持され、屋根荷重は床上の管柱（板壁）と棟持柱により支持される。即ち、個々の荷重を管柱（板壁）及び棟持柱と束柱で間接的に支持伝達する方式。

の四構法原理に類型可能であるが、大きくは通し柱による屋根、床一体支持方式と、管柱及び束柱に分けられた屋根床間接支持方式の二つの原理に分けられる。(Fig-2)

この分類方法は単純化のために、下地や二次部材を無視している。従って、架構に関するすべての要素を分類にとりこんでいない点で問題はあろうが、東南アジア全域を対象として、大まかに構法を分類するという無謀とも言うべきねらいからいえば、第一次構法実態把握の手段としては有効と考える。

本来、構法を分類する上でこれを規定する要因は、荷重支持伝達方式のみでなく、建物架構の組立及び取り付け順序などの機能上の条件、建物架構の固定上の条件が深く関係する。これらの要因をとりこんだ分類は、今後の重要な課題と言えよう。

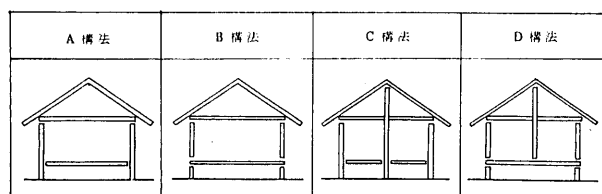


Fig-2 構法原理の類型タイプ

#### 3-2-1-ロ 主架構の地理的分布

主架構原理による四構法の地理的分布を概観してみると、大まかであるが、かなり明確に構法の地域特性を、把握することが可能である。(Fig-3)

A構法をもつ地域は、東南アジアの中で最も広範囲に分布しており、54件を数える。中でもインドシナ半島、マレー半島、スマトラ、ジャワ、バリ、ロンボク、スンバ、フローレス諸島へと続く弧状地帯を中心に集中して見られ、スラヴェシ島の南部、ボルネオ島の東カリマンタン、フィリピンのルソン島の南部に散在している。これらの住居原型は、一般にマレー系住居と呼ばれており、その分布地域は歴史的にも重要な地域で、その昔、プロトマレー（原マレー人）やデュトロマレー（二次マレー人）の民族移動ルートと、深く関連している。

これに対しB構法の分布地域は限られており、この中には三つのグループがある。第一はルソン島北部の山地民族であるIGOROT,IFUGAO,BONTOK 族の住宅、ニアス島の巨大住宅群及びBATAK-SIMALUNGUN などの一部のグループで、その地域や民族の個有な土着的構法を、強固に保持してきた住宅群である。第二は立地条件から規定される建物組立上の要請から、先ず最初に床組をつくりその上に軸組、屋根架構を構成する方式をもつ水上住宅群で、ボルネオ島の東カリマンタンの湿地帯では、一般的な構法である。第三は元来A構法であったものが、堀立独立基礎柱の耐久性の問題から、基礎部を束石やコンクリート杭に変更した住宅群である。このグループは高床式住宅に多く、近代技術の影響を受けつつあるタイ、マレーシアの都市近郊住宅によく見られ、今後は増々増加する傾向にある。

C構法の分布地域は、大別して二つの地域に限られる。第一は、インドシナ半島の北部に住む山地少数民族と中国の影響を受けたヴェトナム人の地床式住宅群である。

第二は、ボルネオ島の西カリマンタン、サラワク、サバ及びパラワン島、ミンドロ島に住む原住民のロングハウス（共同長屋）と呼ばれる高床式住宅群である。また、スマトラ島のMINANKABAUの住宅も第二グループに含まれるのも興味深い。この第一、第二の両グループは地床式と高床式の構法差異をもち且、距離の隔たりや気候差異があるにもかかわらず、架構原理に於いて同一構法に存する点は注目すべきである。

D構法の分布地域で、主に集中して見られる地域はスラヴェシ島の北TORAJA族の住宅群である。稀なケースとしてルソン島北部のBONTOK族の住宅、ペナン島の華僑の水北住宅に見られるが、必ずしもD構法と判断し難い。

#### 3-2-1-ハ 主架構の基本類型

ここでは主架構原理の四構法を、更に詳細に分類する為に、架構をⅠ)小屋組、Ⅱ)軸組、Ⅲ)床組に区分し、

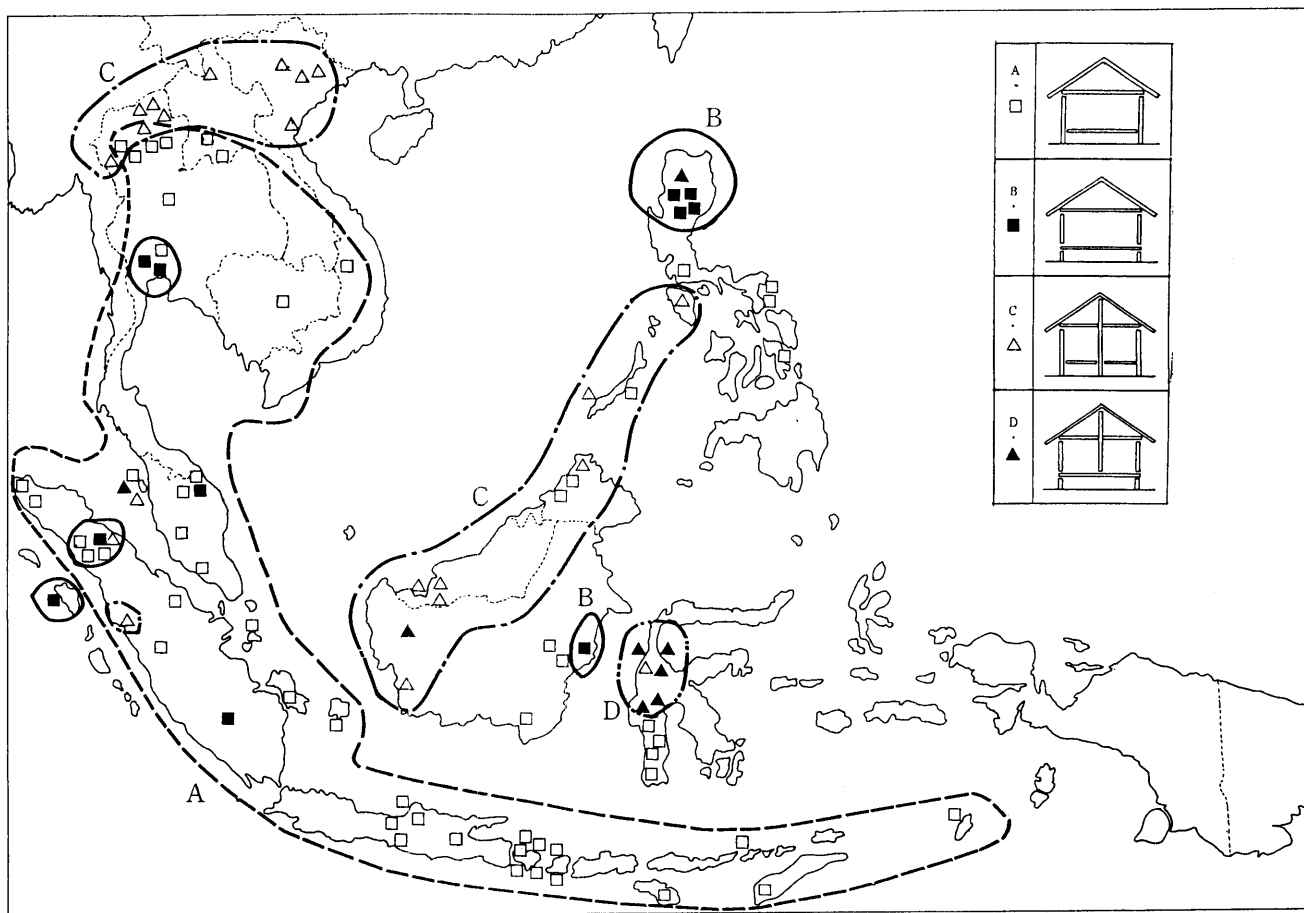


Fig-3 構法原理による地理的分布図

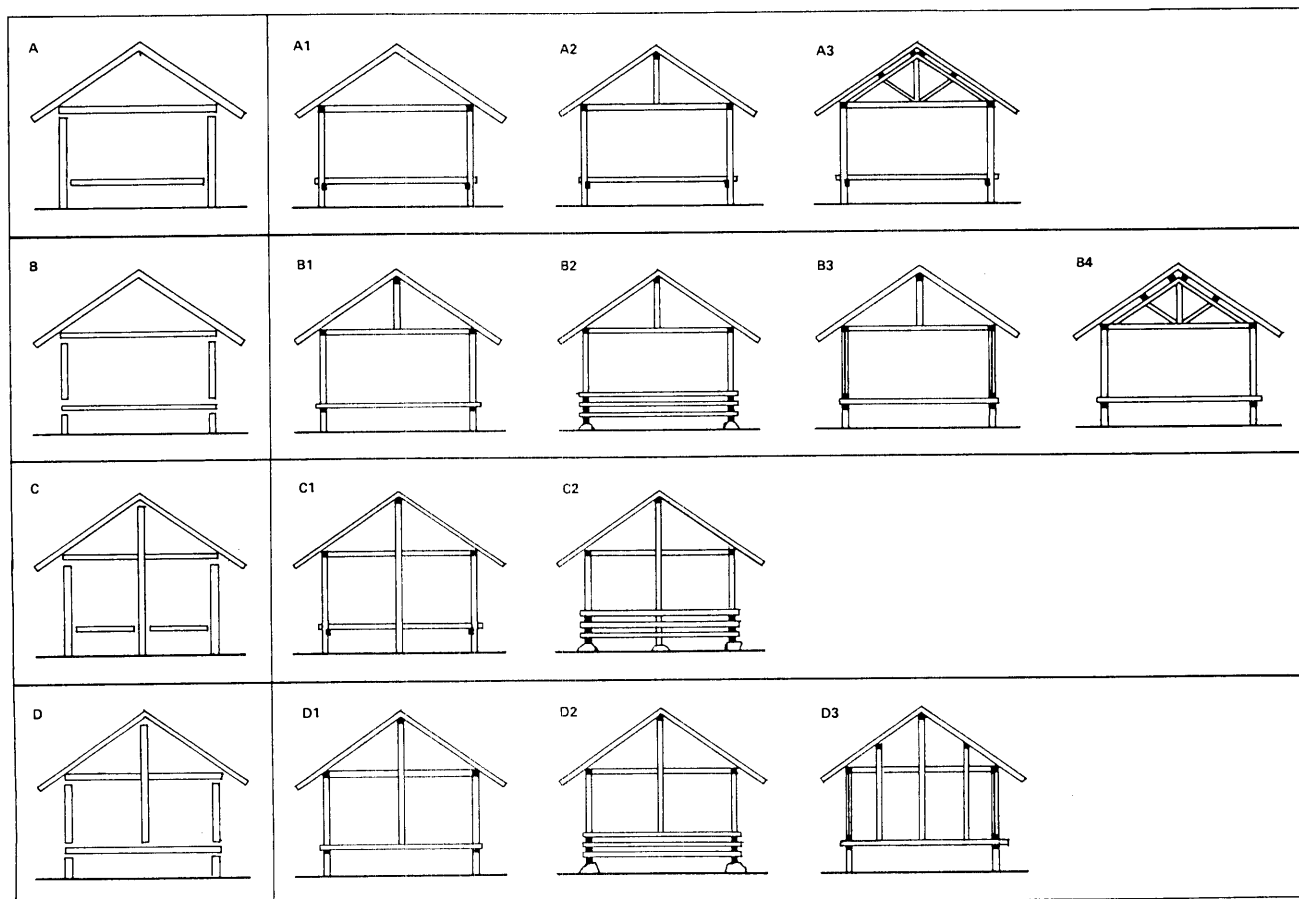


Fig-4 主架構の基本型12タイプ

それぞれの組合せにより主架構の変化型を抽出し、その上で主架構の基本型の類型化を試みる。

ST 1：架構を部位別に区分し、次の様に仮定する。

I) 小屋組：a. 叉首（合掌） b. 束立 c. トラス d. 棟持柱

II) 軸組：α. 柱・横架材 β. 板壁

III) 床組：イ. 通し柱 ロ. 束柱 ハ. 校倉

但し、小屋組の変化で、必ずしも叉首組と合掌組の区別が明確でないものや、竹材を曲げた極木で屋根架構を構成する一種のシエル構法は、すべて叉首組に含めている。その他、小屋組で元来棟持柱構造であったと思われるもので、一部束立に変化しているが力学的に棟持柱に近いケースは、棟持柱構造として扱っている。また、各部位で補強的に用いられている振レ止メ、束貫、小屋筋カイ、斜材、火打梁、方杖、根搦み貫などの二次部材はすべて無視している。

ST 2：次に部位別 I), II), III) の組合せを行なうこと、

|       |       |       |       |   |   |   |   |
|-------|-------|-------|-------|---|---|---|---|
| a α イ | b α イ | c α イ | d α イ | 1 | 1 | 1 | 1 |
| a α ロ | b α ロ | c α ロ | d α ロ | 0 | 1 | 1 | 1 |
| a α ハ | b α ハ | c α ハ | d α ハ | 0 | 1 | 0 | 1 |
| a β イ | b β イ | c β イ | d β イ | 0 | 0 | 0 | 0 |
| a β ロ | b β ロ | c β ロ | d β ロ | 0 | 1 | 0 | 1 |
| a β ハ | b β ハ | c β ハ | d β ハ | 0 | 0 | 0 | 0 |

マトリックス左側のように、主架構24タイプの組合せ類型が考えられる。その内、東南アジア地域で見られる構法は右側の11タイプであるが、その他に (d α ハ) の変化型で床組が校倉と棟持通し柱の併用したものがあり、それを含めて全体では12タイプの基本型が見られる。

ST 3：基本型12タイプを主架構原理のA, B, C, D構法と対応させ整理分類すると次のようになる。図との対応

A 1 (a α イ)：叉首（合掌）+柱・横架材+通し柱

A 2 (b α イ)：束立+柱・横架材+通し柱

A 3 (c α イ)：トラス+柱・横架材+通し柱

B 1 (b α ロ)：束立+柱・横架材+束柱

B 2 (b α ハ)：束立+柱・横架材+校倉

B 3 (b β ロ)：束立+板壁+束柱

B 4 (c β ロ)：トラス+柱・横架材+束柱

C 1 (d α イ)：棟持柱+柱・横架材+通し柱

C 2 (d α イハ)：棟持柱+柱・横架材+校倉+棟持通し柱

D 1 (d α ロ)：棟持柱・横架材+束柱

D 2 (d α ハ)：棟持柱+柱・横架材+校倉

D 3 (d β ロ)：棟持柱+板壁+束柱

### III. 東南アジアにおける都市化と都市住居(Squatter Slam)

#### 0. 産業以前の都市と住居——小型家産制国家とアジア的小共同体

- 東南アジア地域には、前章においてみたように、極めて多様な住居、集落の形態を今猶みることができる。それらは、産業化以前においては、それぞれ、地域の生態系に基づいた、比較的閉じた住居のシステムをもっていたと考えてよいであろう。しかし、多様な住居や集落のあり方を支えたシステムは、丁度、日本の民家や集落が辿ったのと同じように、解体されつつあると見てよい。ここでは、その解体の過程とその背景を、必要な範囲で概観してみたい。

都市化、工業化の洗練をうけてきた日本において、これからの住宅＝街づくりを考える上で、単に、近世以前における住居システムを対置することだけでは不十分であるように、東南アジア地域においても、今後の住宅のあり方を考えるためには、何故、かつての自律的なシステムが崩れていったのかについての歴史的な位置づけが必要である。殊に、土着的な住居のシステムと、現在、伝統的な共同体の建設のための組織やプロセスを活性化する形で行われつつある自助・相互扶互による試みとの関連を窺う上では、それぞれの背景の変化、差異をそれなりに押えて置くことが必要であろう。

- 東南アジア地域における、住居のあり方とその変化を跡づけるためには、様々な背景を考えなければならない。文化的・民族的背景を窺う上では、インド化(ヒンズー化)、イスラム化、あるいは、中国化といった、大きなインパクトを考えることが必要なのであるが、ここでは、主として、都市住居のあり方を捉えるために、植民地化以降に焦点を当てたい。そもそも、アジア地域においては、日本も含めて、都市的集住の伝統は希薄であるといってよい。東南アジア地域においても、都市化は、植民都市の形成とともに始まり、それも第二次世界大戦後に急速に進んできたといってよく、戦後においても外界から閉ざされ、独自の文化を維持してきた地域が残されてきたと言えるであろう。
- 植民地化以前の東南アジア地域の集落や都市(国家)のあり方については、様々な議論がなされつつある。より広い視野においてみれば、アジア的生産様式をめぐる議論の歴史を想起すべきであろう。アジア的生産様式を独自の生産様式とみとめるか——その場合も、これをアジアにかぎらず諸民族に普遍的にみられる段階(原始的共同体崩壊の中から生れる最初の階級社会)とみるか、特殊な地理的、自然的条件のもとにのみあらわれる生産様式とみるか——、独自の生産様式とみとめないか——その場合も、古代奴隷制的生産様式の

一種とみるか、階級発生以前の原始共同体、または階級社会への移行の過渡的段階とみられるか——をめぐって、また、その発展過程を普遍的な世界史発展の一般法則のもとに単系的に捉えるか、また、多系的に捉えるかをめぐって様々な議論がなされてきている。今、ここでは、そうした議論に立入ることはできない。しかし、アジアの生産様式とそれに基づく共同体のあり方が、集落や都市（国家）のあり方を規定したことは踏まえられねばならないであろう。

アジアの生産様式を普遍的な、独自の様式として認める塩沢君夫氏（『アジアの生産様式論』1970年 御茶の水書房）は、アジアの生産様式の基本的経営の単位をアジアの共同体であるとし、その特性を、小共同体内部に私的所有と個性の萌芽をもち、家族がある程度独立性をもつことによって共同体内分業が発展している一方、家族の独立性は弱く、むしろ強い共同体規制のもとに置かれ、共同体を協業単位とするものが多いこと、耕地利用の形態も、共同体全員に平等に配分され、共同体の再生産が、その内部において、ほぼ完全に自給自足的・自然経済的に行われていたこと等にみているのであるが、そうした共同体のあり方と住居の建設、集落の形成が密接な関わりをもっていたことは言うまでもないであろう。

- しかし、一方、そうしたアジアの生産様式論や共同体論が、主として中国やインドを対象とし、また、その関連で日本を扱ってきており、必ずしも、東南アジアを対象としてこなかったことは指摘できるであろう。大規模な人工灌漑や土木工事の必要によって、小共同体の連合が結成され、東洋的社会、国家が成立したという見方が必ずしも東南アジア地域に当てはまらないことも指摘されつつあるのである。

矢野暢氏は（『東南アジア世界の論理』1980年 中央公論社他）東南アジアの集落、都市＝国家の特性を「小型家産制国家」という概念で捉えようとしている。それによれば、東南アジアの都市＝国家は、人為的な灌漑ではなく、河川の利用、その支配を基本とし、河口や水路の分岐点に位置すること、王家という一個の家が実体的権力（小型家産制権力）をもち、所在地の首都がそれ自体完結した国家となること、従って都市の規模は極めて小さいこと、また、社会構造がルースで分節的であること、などの特性をもっている。こうした視点に依れば、東南アジア地域に都市的伝統が希薄であり、植民地化以前において、むしろ、散在型の集落が一般的であったことをよく理解できるであろう。

- いずれにせよ、東南アジアの集落や都市のあり方を捉えるためには、よりグローバルな視野が必要であろう。『文明としてのイエ社会』（村上・公文、佐藤共著 1980年、中央公論社）は、多系的モデルを提出しながら

ら日本のイエ社会のあり方を文明史的なパースペクティブにおいて位置づけているのであるが、東南アジアの都市や集落のあり方をそうしたパースペクティブにおいて捉えることは、日本の都市や集落を捉える上でも大きな意味をもっているはずである。

## 1. 発展途上国の都市化——その過程と構造

現在の東南アジアにおける都市および住居のあり方を位置づけるためには、その前提として、その形成過程とその構造の特質を捉える必要がある。発展途上国の都市化については様々な分野において理論的検討がなされているが、都市社会学における都市化理論を中心として、それを支えるための基本概念、理論的枠組みについて、いくつか整理しておこう。

### ● 植民都市(Colonial City)

発展途上国のほとんどの都市は、植民地化の過程において成立しており、現在に至るまで植民都市としての性格、その遺制を共通にもっている。植民都市は、宗主国都市と政治・軍事・経済、文化といった全ての側面において、その体系の下位におかれ、いわゆる先進諸国における都市と農村の対立のみならず、宗主国の植民地経営との関連を第一義として位置づけられる二重構造をもってきたことが大きな特徴である。

### ● プライメイト・シティ(Primate City 単一支配都市、首座都市)

旧植民地体制は発展途上国の諸都市の間の関係に大きな影響を及ぼしている。すなわち、ごく少数の都市のみが発展し、先進諸国の諸都市の規模関係に関して一般的に指摘される順位規模配列(rank size rule)から大きく逸脱したオリガーキー（少数独裁）の状態、さらには、その特異な例として、プライメイト・シティ(M.Jeferson)の存在をみることができることである。プライメイト・シティは、様々な矛盾を内包した植民地型の二重経済構造（農村のモノカルチャー化）と政治的自決＝中央集権化によって生み出され、その巨大な力と規模によって、国家そのもののあり方を規定しているのであるが、その結果、都市間の分業がみられず、他の中小都市との秩序あるネットワークをみることができないのである。

### 都市化過程の類型

先進諸国とは全く異った都市化の過程を辿ってきたかにみえる発展途上国の都市化は「工業化なき都市化」、「過大都市化」と呼び方をされたりしたのであるが、その要因をめぐっては、都市化と工業化(産業化)の関連をどう捉えるのか、発展途上の社会主義諸国の計画化による過少都市化をどう捉えるのか、先進諸国モデルとの関係をどう捉えるのか、すなわち、過渡的段階を捉えるのか独自のものと捉えるのか等々について



て様々な議論がなされつつある。いずれにせよ、先進諸国の諸都市をモデルとする都市化理論は再検討をせまられつつあると言えるであろう。

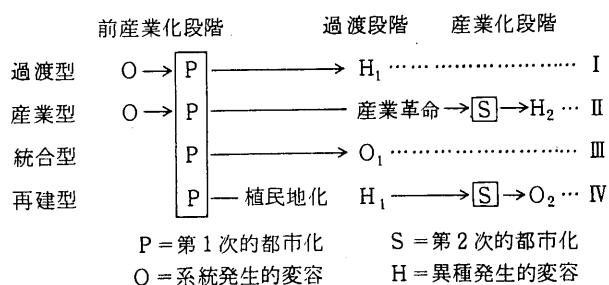
そうした中で、発展途上国の都市化過程を射程に入れた、いくつかの都市化過程の類型化の試みがなされつつあるのであるが、注目すべきものは、都市化を社会過程とみなし、変動概念として措定するものである。その代表である、R.Redfield,M.Siger による発展段階的都市化の理論をみてみよう。

R.Redfield,M.Singer は、まず、都市化に、第1次的(Primary)、第2次的(Secondary)という、二つの発展段階を設定する。第1次都市化とは、前文明段階の民俗社会が、農民社会ないし都市社会へ変容される過程を意味し、産業化以前の都市の形成がそれに当たる。その場合前文明段階の民俗社会は変容を遂げた後も存在し、変容された局地的文化は、共通化された土着的文明として生き続ける。第2次都市化とは、前文明的社会、農民社会民部的に都市化した社会が、異質文化と接触することによって、都市化を進める場合を意味する。殖民地化もこの場合に当たる。

そして、次に、都市の変容についても二つのタイプを区別する。すなわち、系統発生的(orthogenetic)変容と異種発生的(heterogenetic)変容との二つである。前者は、より進んだ経済制度や倫理的秩序の整備をもたらす、前社会の内部からの変容であり、古代、中世の西欧諸都市の成立にみられるとされる。後者は、前秩序や規範からの解放を捉し、意図的な変化、改革を志向する変容である。

R.Redfield と M.Singer は、社会的変容の二つの様態としての系統発生的変容と異種発生的変容の2つの区別、および、都市の果たす文化的役割の差をもとにした第1次的変容、第2次的変容の2つの区別の2軸をもとに、都市化過程を次の4つに区別して捉える。すなわち、I.過渡型、II.産業型、III.統合型、IV.再建型の4つである。(古屋野氏による)

社会変動における都市化類型



最もオーソドックスな都市化の流れとして考えられるのがIIであり、西欧先進諸国の大都市がこれに当たる。Iは、産業化の遅れている先進諸国における地方都市

の場合である。また、IIIは、発展途上国の都市化の場合であり、未だ産業化以前の段階にとどまっている地方都市がそれに当り、IVは、殖民地化によって発展を遂げた中心都市がそれに当たる。

勿論、こうした類型化は、その変容のメカニズム構造をめぐってより詳細な規定が必要であろう。しかし、R.Redfield らの文明史的な視野を含めたパースペクティブによって、発展途上国の都市化の特性をある程度捉えられるであろう。

さらに、様々な理論が模索されつつあるのであるが、B.F.Hoselitz は産出的都市(generative city)と寄生的都市(paracitic city)という、都市の役割をめぐって、二つの類型化を行っている。産出的都市とは、その都市の存在、発展がその国の発展に積極的に寄与する都市をいい、寄生的都市とは、逆に阻害するなど好ましくない影響を及ぼす都市をいうのであるが、それをR.Redfield らの類型と合わせて図示すれば次のようになる。(古屋野氏による)

| 文<br>化<br>的<br>側<br>面 | 経 済 的 側 面                         |                                  |
|-----------------------|-----------------------------------|----------------------------------|
|                       | 産 出 的                             | 寄 生 的                            |
|                       | 〔I〕 過 渡 型<br>異種発生的変容<br>第1次的都市化   | 〔II〕 産 業 型<br>異種発生的変容<br>第2次的都市化 |
| 側<br>面                | 〔III〕 統 合 型<br>系統発生的変容<br>第1次的都市化 | 〔IV〕 再 建 型<br>系統発生的変容<br>第2次的都市化 |

すなわち、B.F.Hoselitz に依れば、第1次的都市化の段階は産出的であるのに対して、第2次的都市化は寄生的である。第2次的都市化は先進諸国と発展途上国とを問わず、国内収奪型であり寄生的であるとするのである。

こうした理論モデル、概念の当否は、各地域で検証されつつあるのであるが、東南アジアについてはT.G.McGeeによって検討されている。そのThe Urbanization Process in the Third World (1967)は、Kuala-lumpurでの調査をもとに、都市化理論の再検討を行っており、R.Redfield らの概念の検討もなされているのであるが、彼は、向都移民職業移動といった国内移動の要因をもとにした理論構築を行っている(段階移住の理論)。

都市構造の特質

複合社会(Plural Societies)——発展途上国の諸都市は、殖民地支配によって、極めて複雑な社会構成を形成してきている。殖民地体制化においては、積極的に

外部人口を移植することが行われたのである。東南アジアにおいては、華僑、印僑の存在がそうである。また、もともと、多民族社会であり、宗教的にも様々な構成員からなる複合社会(J.S.Furnival)を形成するのが発展途上国の都市の特徴である。

二重構造——複合社会の特質は、都市のフィジカルな形態にも投影され、人種ごと民族ごと、また宗派ごとに居住地が形成されている。また、偏在的に富を蓄積しているファーム・セクター(firm sector)と、その外縁に形成されるバザール・セクター(bazaar sector)がはっきりと分かれる二重構造をとるのが特徴である。植民地時代からのエリート（支配）層と被支配層の二分化を基本とする社会階層の分化が、都市形態にもみられるのである。また、都市のインフラ・ストラクチャーについても、植民地時代のもので、近代的都市計画によるものとが重層し、複雑な形態をとっている。

Squatter Slum の形成——農村からの Push（押し出し）要因と都市からの Pull（引っ張り）要因による、すさまじい人口圧によって、大都市に集中した人々は、不法占拠によって、スラム地区を形成する。スコッター・スラムが形成されるのは、公道、鉄道線路の周辺といった公的用地、民間の遊休地であるが、湿地帯や運河の周辺のように居住環境としては極めて劣悪な場であるのが一般的である。発展途上国のスコッター・スラムは、Kampung（インドネシア、マレーシア）、barong-barong（フィリピン）、barrios（南米）、bidonvilles（北アフリカ）、bustee（インド）など、様々な呼び方をされるのであるが、都市全体を覆いつくす場合が多く、西欧の近代都市が、産業革命の過程で、内部に抱え込んだスラムの概念を超えているということができよう。

伝統的下位文化の保持——スコッター・スラムの居住者たちは、必ずしも、ばらばらに解体されたアノミー状態に陥入るわけではない。東南アジアにおけるスコッター・スラムは、伝統的な共同体組織、相互扶助組織を都市へそのまま持ち込んでおり、フィジカルな環境は劣悪であるにも関わらず、社会的な環境としては、必ずしも不健全ではないとされている。また、都市へ流入しても、伝統的な文化や慣習を保持していることが特徴である。

以上のような特質をもつ発展途上国の大都市のフィジカルな構造を一般的に整理すれば、次のようなエリアからなっていると言える。

I. 中心業務地区——近代的なビルが並ぶ、政治・経済の中心・副都心が備けられる場合もある。II. 旧中心部——折衷主義の建築が残されている歴史的地区、あるいは商業地区、華僑は独自の商店街（チャイナ・タウン）を形成するのが一般的である。III. 高級住宅街

——コロニアル・スタイルの邸宅が集中する地区。IV. スコッター・スラム・エリア——都市の大半を占める、また、郊外住宅地が形成される。

## 2. 東南アジアの都市とその生態

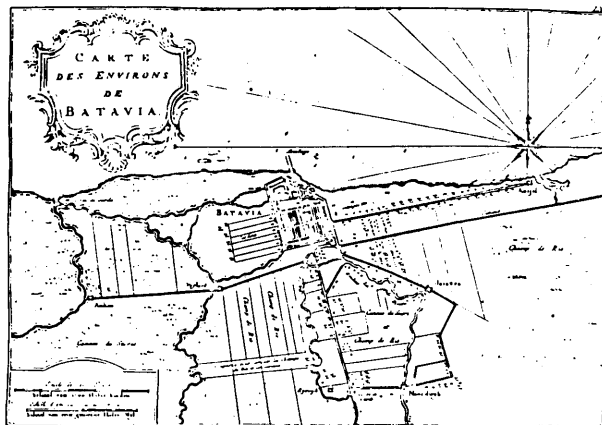
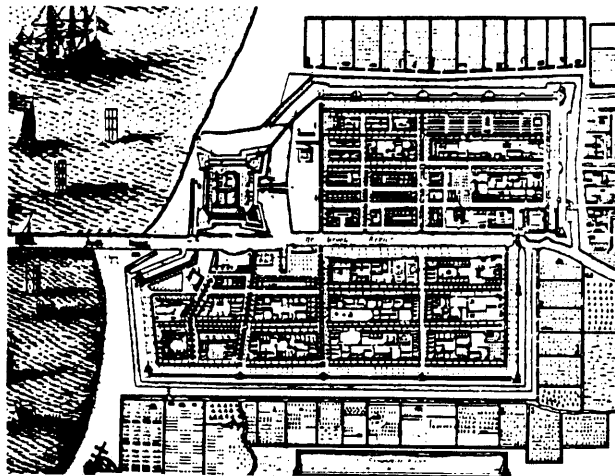
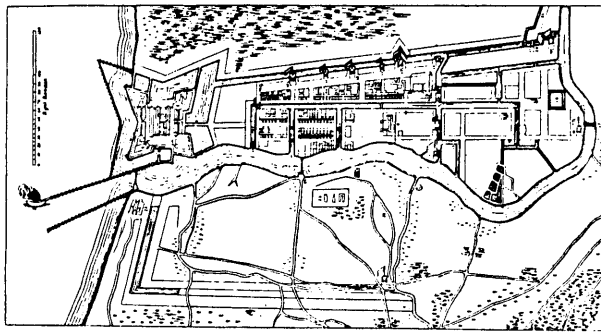
### 2-1 植民都市の形成

東南アジアの都市の形成過程については、大きく三つの時期を区別することができる。すなわち、植民地化以前、植民地期、独立以降の三つである。植民地化以前の土着的都市は、大きくは、内陸部の宗教都市と海岸部における交易都市との二つにわけられるのであるが、既に述べたように、都市的伝統は希薄であり、「小型家産制国家」の特性をもっていたと考えられている。殊に、フィリピンには都市の伝統がないとされるのであるが、マレー半島には、クアラ川を中心に、また、大陸部には、メコン、メナム、イラワジ川といった大河川の流域を中心に、また、ジャワやインドシナ半島の海岸部には、多くの都市国家が存在していた。しかし、それらは極めて規模は小さく、植民地化によって発展を遂げる最も古い都市である Manila（1571年）や Batavia（1619年）にしても、単なる集落にすぎなかったとされている。

今日の東南アジアの大都市は、Krung Thep（Bangkok 1982年チャクリ王朝の首都）および Hanoi（Annamite 帝国の首都）を除けば、全て、西欧の植民地化によって、その基礎が築かれたものである。その都市形成の過程は、宗主国の違いにより、各都市により様々である。しかし、いずれも、共通に、植民都市としての性格をもっていることが大きな特徴なのである。

Singapore（1819年）、Rangoon（1852年）、Saigon（1859年）、Hanoi（1873年）と、今日のプライメイト・シティの多くは、19世紀において植民地化されるのであるが、Manila と Batavia は、東西交易の拠点として、逸早く、植民地化されている。

Manila の場合、スペインによって、メキシコ、新大陸での経験をもとにした植民地支配のシステムが持ち込まれ、フィリピン諸島の他の拠点との有機的関連のもとに発展を遂げるのであるが、都市のフィジカルなパターンも、新大陸の場合と同様にグリッドパターンが持ち込まれていることは興味深い。また、Batavia の場合、オランダによって、城砦と運河による、ヨーロッパの中世都市の伝統が持ち込まれているのが興味深い。ここでは、植民都市のフィジカルな構造とその発展過程について詳しく触れる余裕はない（Philippines については、D.F.Doepers の The Development of Philippines Cities before 1900 が、Jakarta については、J.L.Cobban の Geographic Notes on the first two Centuries が、ある程度まとめている。また、都市史として、Streets of Manila by



JAKARTAの変遷

L.B.IRA 1977,および DJAKARTA through the ages, The growth of JAKARTA などが参考となる) が、東南アジア研究の一つの興味深いテーマといえよう。また、植民地化によって持ち込まれる、コロニアル・スタイルの住宅は、土着的な住宅のあり方に大きな影響を及ぼす。ここでは、直接的なテーマではないが、住居のあり方の変化、伝統的な仕組みの変化を窺う上では、植民地化は大きなモメントとなったと言えるであろう。

#### IV. 伝統的住宅生産技術と自助・相互扶助によるロー・コスト・ハウジング

##### 1. 居住政策の概要

東南アジア諸国および発展途上国における居住政策の中心は、スコッター・スラムに対する対策である。そのスコッター・スラムに対する対応策を中心とした居住政策は、全般的にまとめると次のような7つの施策に分けて考えることができる。

- A. ロー・コスト・ハウスの供給—Low cost housing
- B. スラム・クリアランスと再開発—Slum (Clearance & Redevelopment)
- C. 不良住宅地改善、住環境整備—Slum Improvement (Upgrading)
- D. 宅地分譲—Sites & Services
- E. 移住—Resettlement, Immigration
- F. 農村住宅供給—Rural Housing
- G. 住宅資金融資

公的機関による直接的な住宅供給は、大規模な計画住宅地の開発を中心として、各国ともに大きなウェイトをもって行われてきており、住宅融資とともに、居住政策の大きな柱であった。しかし、そうした西欧理念に基づいた公的住宅供給のあり方は、一方で行きづまりをみせ始めてきている。一つには、他の施策に比べてコストが高く、必ずしもロー・インカム・ハウジングとならないこと、また、公的供給による量をはるかに上まわる量が必要とされていること、さらに、殊に高層住宅や集団住宅が必ずしも居住者の生活になじまないことなどがその理由である。国によって、状況は異なるのであるが、公的住宅は、一つのモデルとして、デモンストレーションの意味をもつにすぎないのが一般的である。

スラム・クリアランスによる再開発は、大規模な住宅地開発とともに試みられてきたのであるが、スラムの存在自体が発展途上国の政治的、経済的、社会的諸問題の集約的表現である状況において、クリアランス型の再開発は、居住者達の抵抗を受け、むしろ圧迫を生み、矛盾を拡大する傾向にあると言えるであろう。

新規開発、再開発を問わず、直接的な住宅供給を行う施策に対して、オン・サイトで住環境整備を行おうとす

るのが、Slum Improvement (Upgrading) Project である。これは、スラム・エリアの生活構造を大きく変えずに、都市公共サービスと最小限のインフラストラクチャー（上下水道、歩道、ゴミ処理）の整備を行おうとするものであり、インドネシアのK I P(Kampung Improvement Project)をはじめとして、タイ(SUP)、フィリピン(SIR)などで同じような手法によって行われつつある。生存のためにぎりぎりと言ってもいい、劣悪な住環境を改善することは、緊急の課題であり、その根本的解決を将来に残すものと言えるのであるが、投資効果が高く、大きな成果を挙げつつある。Low-cost-housing が、土地問題などで行き詰りをみせてくるにつれて、居住政策のウェイトは次第に、オン・サイトの住環境改善に移行しつつあるとも言えるであろう。

Sites & Services Project は、最小限の施設整備（上下水道、道路、公共施設）を行った宅地を供給するものであり、各国において、ユニークな試みがなされている。住宅の建設は、セルフ・ヘルプを基本とし、資金、技術、材料の援助が行われるのであるが、最も一般的なのは、水回りとワン・ルーム程度のコア・ハウスを供給し、増改築その他を居住者の手に委ねる方法である。こうした手法は、住宅そのものの供給がコストがかかりすぎるといふ点と、人的資源の有効利用という視点から生み出されたと言ってもいいのであるが、それ故、現実性をもって、かなり広範に行われつつあると言えるであろう。Sites & Services Projects は、Resettlement Project において行われる場合が多い。

その Resettlement Project ~~と~~ 及び Immigration は、スコッター・スラムの居住者を都市郊外や他地域（インドネシア・フィリピンでは他島）へ移住させる、直接的な人口分散計画である。クリアランス型の再開発とリンクして行われる場合もある。Resettlement は、様々な試みられてきたのであるが、雇用対策が不十分であることが多く、就業機会を求めて都心へUターンする現象がみられ、必ずしも、人口分散の実効があがっていないのが現状である。

Rural housing は、農村の生産基盤の充実によって、向都移動を抑制すべく試みられつつある。その場合、地域産材を用い、その地域の住居の伝統を考慮した住宅のあり方が模索されるのが一般的である。国によっては、都市のスコッター・スラムに対する対策が行詰りをみせることから、Rural housing にその居住政策のウェイトを大きく転換させつつある国もみることができる。

こうした、居住政策のそれぞれは、各国の事情に基づいて、ウェイトを異にしながらいわれつつあるのであるが、ASEAN 諸国においては、Singapore および Malaysia は経済的にも、技術的にもレベルが高く、Indonesia, Philippines, Thailand とは様相を異にしてい

ると言うことができるであろう。

### 3. 自助 (Self-help), 相互扶助 (Mutual-aid) によるロー・コスト・ハウジング

#### 3-1 適正技術と住民参加

前節において概観したように、東南アジア諸国 (ASEAN 諸国) においては、当初、先進諸国型の住宅供給、住宅地開発が目指されるのであるが、その後、大きくその方向を転換しつつあると言っている。1978年に ASEAN Association for Planning and Housing (AAPH) が組織されたのであるが、1980年3月に Manila で開かれた第2回会議では、「コミュニティ開発のための適正技術」(Appropriate Technology for Community Development in the ASEAN Region) がテーマとされたことが示すように、コミュニティ (kampong, barangay) をベースとする、しかも、地域産材利用による都市・農村開発が目指されつつあるのである。

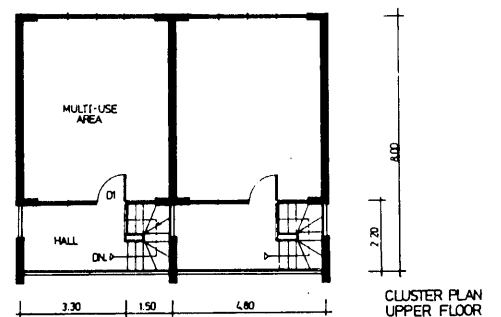
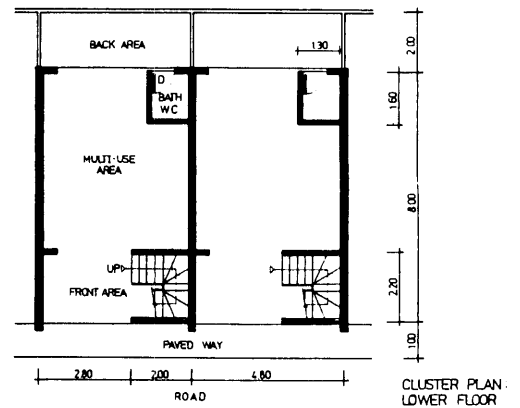
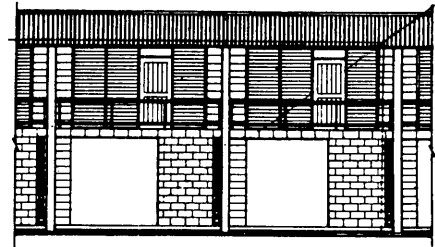
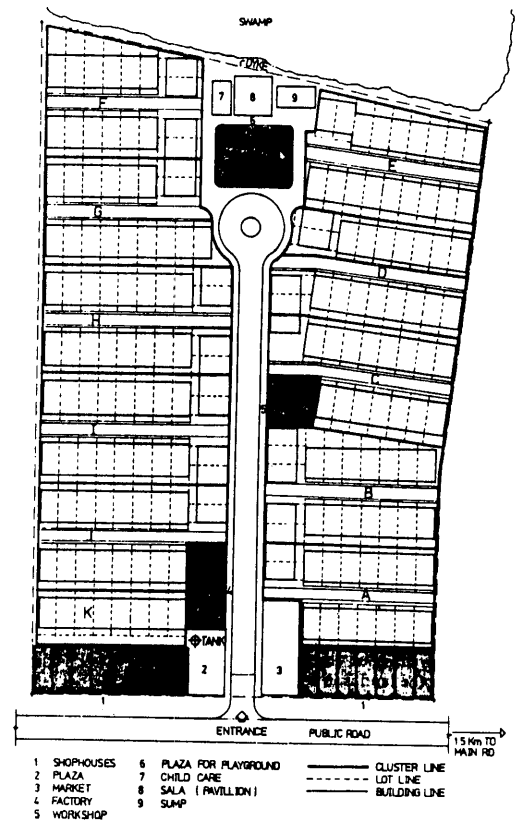
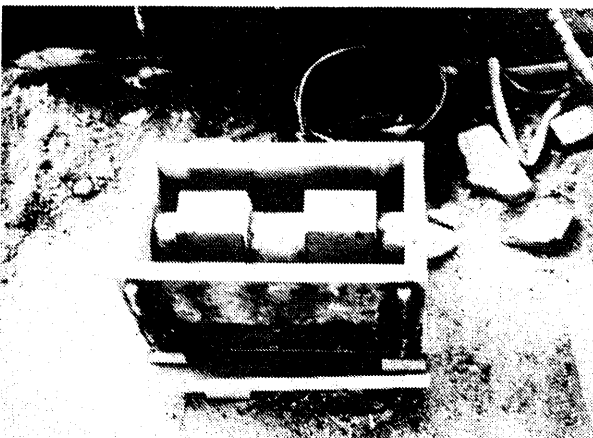
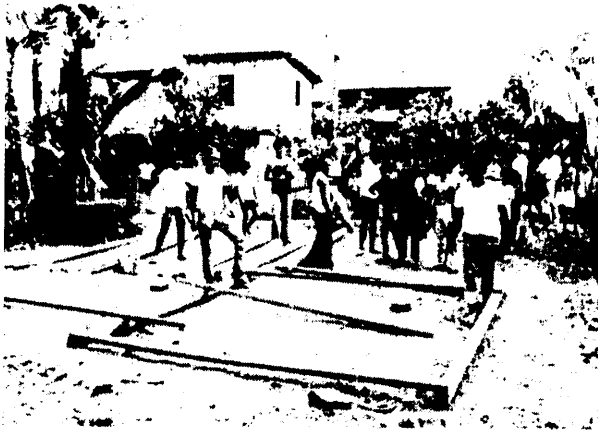
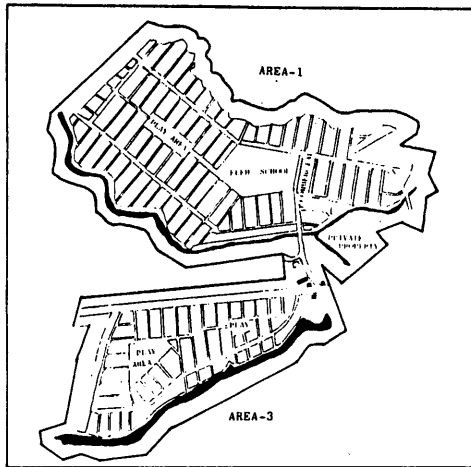
採択された決議の主なものは以下のようなものである。

- (1) 住民の生活上の諸問題の、居住計画における総合的把握
- (2) 社会的目標実現のための民間セクターの積極的参加
- (3) 住宅所有の概念とコミュニティ開発概念との結合
- (4) コミュニティ・オーガニゼーションと国民的目標との統合
- (5) コミュニティ開発プロジェクトへの住民参加の優先
- (6) 学校教育および社会教育における土着的 (indigenous) な材料、技術の利用方法の教授・訓練。住宅および周辺環境改善のための“Do-it-Yourself”的アプローチの採用
- (7) 地域の実情に合った法・制度の運用。地方自治体への権限拡大
- (8) 社会的、経済的、生態学的諸問題に対する解決手段としての適正技術の採用

他に、ASEAN 諸国相互の経験交流などが決議され、各国の経験が討議されているのであるが、AAPH は新たな方向を模索しつつあると言えるであろう。

東南アジア地域における、そうした新たな住宅＝街づくりのあり方の柱となりつつあるのは、伝統的な地域共同体組織の活性化による Self-help, Mutual-aid と、地域産材利用の技術(AT)の開発である。

Sites & Services project にしろ、Slum Improvement project にしろ、また、Rural housing の場合、特に、伝統的な共同体組織をもとにした Self-help Mutual-aid によるのが基本とされている。Indonesia における gotong



royong, Philippines) における bayanihan といった、農村における伝統的な相互扶助組織は、都市においても息づいており、その利用、活性化が住宅＝街づくりにおいても試みられつつあるのである。

一方、地域産材利用の技術の開発は、必ずしも、これまで積極的に行われてきたとは言いがたい。しかし、資源問題に対する認識が深まるにつれて、それは積極的に行われつつあると言っている。Indonesia におけるトラス・ライム・ブロックの開発、Thailand におけるソイル・セメント・ブロックの開発、フィリピンにおけるココナツの建築材料化など既に、様々な試みがなされつつある状況にあるのである。

### 3-2 Informal Sector の試み

フォーマル・セクターによる様々な公的住宅供給のアプローチに対して、東南アジアを含めた発展途上国においては、インフォーマル・セクターによる下からの、グロス・ルーツに根ざした様々な試みを見ることが出来る。

東南アジア地域においては、W.Keyes を中心とする Freedom to Build の試み(Philippines : Dasmariñas), S.Angel を中心とする Building Together の試み(Bangkok), R. Sularto を中心とする Bali での試みが極めて興味深い。また、アジア地域では、Ahmedabad におけるグループ ASAG による Rural Housing, Sri Lanka における Fr. Pieris の Self-help housing, New Guinea の H. Norwood らによる Urban Settlement Upgrading project, 韓国における J. V. Daly らによる Bogum Jahri project など数多くの、Self-help, Mutual-aid による Housing の試みを見ることが出来る。

ことが出来る。

Freedom to Build は、その名を、第三世界における Self-help housing に対して大きな影響を与え、その理論的支柱となった J.F.Turner の著書名から採っているのであるが、その Turner の主張である“Housing by People”を実践する組織体として、W.Keyes によって設立されたものである。「貧困者の建設活動を最も束縛するのは、資材を得る手段と費用をもたないことである」という視点から、建設資材を供給する Work shop を中心に運営されている。完全な Self-build を基本とし、伝統的な Paluwagan System (日本の頼母子講に当る)と Bayanihan による建設システム(日本の結に相当)を中心に、幅広い活動を行っている。

Building Together は、新たにデザインされたコンクリート・ブロックを用いた、連棟テラスハウス形式の躯体システムによるプロジェクトを行っている。PC梁、階段等全てが部品化され、ブロックを始めとする部品は、現場生産されている。建設は3人で可能であるように設計され、居住者自身が建設プロセスに参加し、参加の度

合によって、住宅の価格が決められるシステムとなっている。

Bali 島の, R.Sularto らによるプロジェクトは、バリ地震後の応急的な住宅供給計画であるが、Bali の住居の伝統を考慮した建設システムがとられている点で実に興味深い。

こうしたインフォーマル・セクターによる試みは、実験的な性格が強いものが多い。しかし、地域の生態系に基づく住居システムを考える上では、興味深いモデルとすることができるであろう。

### 3-3 Self-help housing の諸問題

Self-help housing の理論的背景としては、例えば、既に述べたように、J.F.Turner の“Housing by People”, “Freedom to Build”を挙げることができる。また I-1 で触れたように、産業社会のパラダイム転換を目指す I. Illich の作業や地域主義論や AT 論を想起することができる。そうした理論的背景を考慮しながら、再度、Self-help Housing の理念を要約してみれば、およそ以下のようになろう。

- (1) 居住者は、Housing における主要な決定に関して、より自律性(Autonomy)を持つべきであり、そのデザイン、建設、維持管理に積極的に参与すべきである。
- (2) Housing のための資材(材料、部品)の生産、配分のシステムは、官僚制的なヒエラルキー構造ではなく、下からのネットワーク構造をとるべきである。すなわち、決定権を出来る限り、地域レベルに移行し、下からの決定システムをとるべきである。
- (3) Housing はプロセスであり、公的機関や制度的枠組によって与えられるもの(住宅)だけではない。また、ノン・フィジカルな側面も含めて考えられねばならない。
- (4) Housing は、巨大技術によるのではなく、身近な手の届く技術に基づくべきであり、そのためには、伝統的な住宅生産技術を踏まえた技術のあり方(AT)が模索されるべきである。
- (5) 巨大な組織によってではなく、地域共同体に根ざした建設のための組織を基本として Housing はなされるべきである。
- (6) 地域の固有性のもとに(地域産材の利用、地域の生態系に即した住居の仕組み)全体のシステムが考えられるべきである。従って、小規模なエリアでの Housing がその単位となる。

以上のように、互に関連する Self-help housing の理念は、その現実化に当たっては多くの問題を捉えていると言わねばならない。

Self-help housing の限界は、産業的生産様式が支配的である現実のコンテクストにおいては疑似的なものとし

てしか成立しないというところにまずある。材料の供給にしても、現実には、市場価格によって縛られざるを得ないのである。より根本的には、現在、様々に行われている実験的モデルを一般化する方法が見出されていない点である。下からのネットワーク構造に基づく全体システムのイメージが理論的に示されていないのである。

さらに、Self-help housing に対する厳しい批判は、それが産業社会の官僚制的組織構造の中で、それを補完する別の機能を担ってしまうことへ向けられている。第三世界における Self-help housing は、必ずしも居住者の自律性に基づくものではなく、やむを得ぬ状況において、人的資源を雇用対策を含めて有効利用するレベルで位置づけられるにすぎないものであり、居住者に対する二重の搾取を行うものであるという批判である。

I. Illich もまた、そうした脈絡において、Self-help の概念そのものを批判し、否定している。I. Illich に即して、ここでいう Self-help の理念を捉え直せば、自律協働性(Conviviality)に基づく Housing ということになる。しかし、自律協働性に基づいた生産様式を如何につくり出すか、居住者が自己を実現するための一貫するプロセスを如何にしてつくり出すか、という問いそのものが Self-help housing の限界として問われていると言うことはできよう。

Self-help housing において、伝統的な共同建設組織の活性化は強調されているのであるが、一方で、地域産材の利用や地域の生態系に基づく住居のイメージについては希薄である。それも、一つの限界として指摘しうであろう。材料や部品については、既存の生産・流通のメカニズムに縛られざるを得ないのが現状であり、地域に固有な住宅や街の表現たり得ていないのである。

また、Self-help housing が、居住者間の格差を拡大する方向に作用しがちであることも一つの問題点として指摘しうであろう。居住者の自律性と計画の規定性をめぐる一つの問題である。

こうした Self-help housing をめぐる諸問題は、言うまでもなく、先進諸国や日本においても共有化しうる問題と云っていい。一つの問題は、住み手の自律性が何故疎外されているかである。計画論としては、住宅＝街づくりの主体がその自律性を実現しうるシステム、プロセスを計画することの矛盾を整理し、理論化することが必要と言えるであろう。

#### 〈研究組織〉

|            |           |           |
|------------|-----------|-----------|
| 研究主査<br>委員 | 布野 修司     | 東洋大学工学部講師 |
|            | 安藤 邦広     | 東京大学工学部助手 |
|            | 勝瀬 義仁     | 東洋大学工学部講師 |
|            | 浅井 賢治     | 東洋大学工学部講師 |
|            | 乾 尚彦      | 東京大学大学院   |
|            | 岡 利実      | 目白都市建築研究所 |
|            | 山下 浩一     | 東京大学大学院   |
|            | ハタフィージョージ | 東京大学大学院   |